



開山 1300 年を迎えた白山(御前峰)と奥宮祈祷殿・社務所 (by N. Toga)

金沢大学ワンダーフォーゲル部 OB 会会報 vol. 32

目 次

		(頁)
○B会会長 あいさつ 「ベルクハイムへの憧れ、五度(ごたび)。」	20期 久富 象二	1
【小屋作業に寄せて】		
2017年 小屋作業に参加して	20期 松下 和隆	2
【○B会活動便り】		
近畿支部活動報告	11期 加藤 忠好 8期 黒崎 史平 15期 三宅 育	6
	5期 金岩 孜 12期 赤地 賢一	
東海支部活動報告	17期 渡邊 和文 17期 小島 敬	22
第20回 野沢温泉スキー合宿 2017	幹事 11期 青柳 健二	24
【同窓会便り】		
ワンゲル7期生大集合	7期 澤田 孝雄	29
27年ぶりに静岡にてワンゲル15期会	15期 増田 富雄	29
24期 坪井陽典君を偲ぶ会	24期 酒井 智治 24期 磯見 晃	31
【現役より】		
主将あいさつ	主将 61期 山本 球	34
夏合宿 北アルプス	62期 宿南 勇斗	34
夏合宿 後立山	62期 小池 慶哉	35
夏合宿 南アルプス	61期 松島 英志	37
夏合宿 北海道	61期 井上 皓介	38
【白山開山1300年に寄せて】		
平泉寺から白山越前禅定道を歩く (平泉寺一市ノ瀬)	4期 佐藤 秀紀	40
開山1300年を迎えた白山一かつての白山信仰と、白山山中での昔のくらしー	11期 長岡 正利	42
【投稿の頁】		
息子と飯豊連峰を縦走	4期 佐藤 秀紀	45
マレイシア・キナバル山登頂記	6期 合津 尚	47
我ら千葉組5人衆	9期 千葉組	49
つれづれなるままに	15期 舟田 節子	50
ふるさとの雑木林で想う ~この都市の片隅に~	17期 小島 敬	54
日本の奇山	9期 山中 重夫	57

表紙の言葉〈白山奥宮祈禱殿〉(梅 典雅/19期)

近年に新改築された白山の登山施設などを取り上げてきたこのシリーズも最終の5回目となった。今年(2017年)は、越前の修行僧、泰澄が白山を開いたとされる養老元年(717年)から1300年にあたり、環白山の各地で様々な記念イベントが催され、地元紙はこぞって白山や開山に関する特集・連載記事を掲載した。7月の週末は天候の悪い日が多くなったにもかかわらず、室堂の宿泊者数が増えたのもその効果のあらわれだとされている。表紙の白山奥宮祈禱殿も3年前から建て替え始め、節目の年に竣工となった。創建2100年を超える白山比咩神社でありながら、仏教色の濃い開山を記念した奉祝大祭も執り行われた。それもこれも白山の神仏習合の長い歴史がなせるわざなのである。

なお、岐阜県に続き石川県でも登山届の提出が義務化された年でもあった。罰則(5万円以下の罰金)の適用はまだ先(2年以内)ではあるが、白山登山の折には気をつけたい(下記URL参照)。

http://www.pref.ishikawa.lg.jp/bousai/bousai_g/hakusan_kazan/jorei.html

表紙写真:梅 典雅(19期) 表紙題字:中川 晃成(23期)

「ベルクハイムへの憧れ、五度(ごたび)。」

20期 久富 象二

今年も順調に小屋作業進めることができました。

新道整備は現役諸君のパワーとOB諸氏の経験と匠とも言える技で、高三郎までもう一歩のところまで到達しました。来年春には開通できる見込みです。

作業に参加した現役生も高三郎と伐開作業の魅力を感じつつあるよう、前部長の村居君は「開通の瞬間にはぜひ立ち合いたい。」と意気込み、卒業して就職のため金沢を去る元部長の山路君は「数年後には必ず登りに来る。」と語り思いを残しています。

新道整備はテントや水・食糧を担ぎ上げ2泊3日で行われていますが、3日目に作業を終えたOB作業隊の皆さんには、戦い終えた戦士は斯くの如くか、と思わせるような充実感を漂わせてダムに帰ってきます。大変お疲れ様です、もう一息です。

小屋の補修作業は柱の補強や根太の補強などが行われ、さらに長生きできそうです。今年は小屋で蛇の抜け殻を2つ発見しました。そのうちの1つは、天井から垂れ下がって最初はタオルかと思ったほど立派な抜け殻でした。蛇にも住み心地のよい小屋なのだと思います。

小屋作業はワングル部員とOBだけではなく、倉谷を愛する人たちに見守られ協力いただいて実施できています。山本さん(以前ボートを出していただいていた山下さんの甥御さん。山下さんは今年の夏、残念ながらお亡くなりになりました。)にはボートに乗せていただき、毎回小屋作業の前には、残雪の量や倉谷川の水量などについて知らせてくれます。また雨量計傍のヘツリを丸太や鎖で補強していただいているおかげで、この難所を通過することができます。先日、ベルクハイム下で長い間小屋掛けをしておられた木挽さんから電話があり、年齢やゲートの鍵のこともあり倉谷に入ることができなくなつたけれど、倉谷で知り合った人たちと思い出を語る会を開きたいとのことで、3期の田村さんの様子をたずねてこられました。この会が開かれたならきっと楽しい会になることでしょう。

昨年からダムまでの県道(倉谷土清水線)を通行するには、寺津に設置されているゲートの鍵を利用する都度県央土木事務所から借用し、使用後は返却しなければなりません。借用許可の判断手順を示すフロー図があり、私たちは「ゲート内に土地・建物を所有している」→「用水の管理・墓の管理・墓参り・小屋の管理等」でOKです。このようなフロー図に従わなければならぬのは甚だ不本意ですが、土木事務所と議論をしても拠つて立つ判断基準が異なるので一致点を見出すことは無理であり、まずは金沢市民の水がめである犀川ダムの見学さえ妨げている、遅々として進まない県道工事を問題として、工事の早期完了を促すのが得策かと思います。

60周年記念総会(来年9月15日を予定)でごあいさつさせていただきますが、OB会長として寄稿する「やまと」巻頭言は今回が最後です。会長を退任しても一OBとして「ベルクハイムへの憧れ」は続きます。今後もよろしくお願いします。

2017年 小屋作業に参加して

20期 松下 和隆

【日程】

- ① 2017年春、5月13日～5月15日（2泊3日）
- ② 2017年秋、9月30日～10月2日（2泊3日）

【参加者】

■ OB (18名)

- (13期) 大島良治、辰野隆義、吉本良治、吉田穂積、柴田茂樹、柴田訓子
(15期) 上馬康生、奥名正啓、坂尻忠秀、松縄宏
(16期) 北川隆次、中野淳一
(17期) 上田喜久雄
(19期) 梅典雅
(20期) 久富象二、松下和隆
(21期) 梅睦美
(22期) 黒崎敏男

■ 現役 (7名)

- (59期) 山路遼太郎
(60期) 村居龍樹、梅北浩志諒
(61期) 井上皓介、亀谷英太、横町航平、内田大智

【1】ベルクハイムに集う

春はシャクナゲ、秋はアケビ。犀奥の自然は豊かで瑞々しく、昔も今も変わらずに僕らを癒してくれます。ここに誘われ、今年もワンゲル仲間が春と秋の2回、ベルクハイムに集いました。

犀川ダムまでの林道が閉鎖されて早や6年。特別な許可をもらわないとベルクハイムへ行けない状況が続いています。それはまるで「北方領土」へのお墓参りのようです。年2回、こうやってベルクハイムへ入れる機会は、ひょっとしたら貴重な体験となるのかもしれません。なんてことを思いながら、今回も小屋作業に参加しました。



参加メンバー（春の小屋作業、柴田氏撮影）



参加メンバー（秋の小屋作業、上馬氏撮影）

【2】アカシアの雨にうたれて～♪

このまま死んでしまいたい～♪、とは昔懐かしい西田佐知子のヒット曲ですが、ベルクハイムの傍らには枯れかけた大きなニセアカシアの木があります。永年の風雪に耐えかね、「このまま倒れてしまいたい～♪」と歌っているかのようでした。もしこの木が、ベルクハイムに向かって倒れてきたら大変なことになります。早急に対応（たぶん伐採）しないと、ある時ベルクハイムへ行ったら木に小屋がつぶされていたというような悲惨な光景を目にするかもしれません。小屋の補修作業としては、現在、ベルクハイムの構造補強（筋交い等）が有志の皆さん的手により進められていますが、これに加え新たな難題が浮上してきたようです。



ニセアカシアの木（左トイレの背後、上馬氏撮影）

【3】崩壊が進む…倉谷川沿いの道

いつも難儀する雨量計を過ぎた「へつり」の箇所は、(今回でもう6回目ですが)僕にとってはいつも憂鬱な場所です。へつりに吊るされた丸太の上をカニの横這いで進むのですが一瞬たりとも気が抜けません。丸太は水に濡れて黒光りしています。どう見てもこれは滑るでしょう…という箇所に足を置くのは勇気がいります。おのずと

ロープを握る手に力が入ります。そうかと思うと丸太自体が水没している箇所もあります。もはや濡れることを覚悟するしかない。観念して山靴もろとも水の中へ。じゅわ、じゅわ…と靴下が濡れるあの感触、皆さんもご存知の通りだと思います。ベルクハイムへ行くのに、こんな思いはしたくないですよね。



丸太の横這い（雨量計付近にて、柴田氏撮影）

このような箇所は一か所だけではなく、近年、川岸に沿って広がり始めてきました。上の写真の雨量計（右端）の向こう側も、実は侵食が進み今にも道が無くなりそうになってきています。ひょっとしたら次回の小屋作業では、もう無くなっているかもしれません。地元の人のご尽力により、丸太による補修が期待されますが、それは他力本願、どうなることか実際のところは分かりません。



崩壊が進む谷沿いの道…もはや風前の灯火

【4】OB チェーンソー隊

春の小屋作業では、新道の倒木を処理する部隊、その名も「OB チェーンソー隊」が活躍しました。高三郎へ機材を荷揚げする際、先陣隊は道を塞ぐ何本かの巨大な倒木に悩まされました。そこでベ

ルクハイムへ無線で支援を要請しました。するとあつという間にこの応援隊が結成されたというわけです。無線でふたことみこと話す上馬さん（15期）。傍で見ていて思いました。やっぱりワングル仲間はいいなあと。阿吽の呼吸というか、結束の強さとでもいうか…何かそういうものを感じました。



OB チェーンソー隊（バルクハイムにて、柴田氏撮影）

2日後、先陣隊が高三郎から下山するときには、倒木は全て切り落とされていました。お陰様で、しゃがんだり乗り越えたりしないで快適に下山できました。感謝、感謝です。倒木の切口にふと目をやると、試行錯誤した跡、何度も何度も切りなおした痕跡が見受けられました。ベルクハイムにあったチェーンソーの歯は、ボロボロだったとのこと。本当に、お疲れさまでした。



切り落とされた倒木…グッドジョブ!!

【5】現役ボッカ隊

現役諸君には資材の荷揚げを担当してもらいました。新道の奥深い場所で作業を3日間継続して実施するため、テント、食料、水などの荷物運搬を手伝ってもらいました。みんな明るくて気さく。いい連中ばかりです。それに若いから、馬力がある。一人30キロぐらいの荷物を担ぎ、新道の急登もなんのその、グイグイと登っていきます。頼もし限ります。



現役ボッカ隊。右から（3年）村居、梅北、（2年）井上、亀谷、横町くん（柴田氏撮影）

ボッカを終え、新道を3時間かけて下山してきた彼らを迎えたものは、「熊本スイカ」でした。OBからの思いがけない差し入れに大喜びの現役生たち。わ~い、すいかパーティーだ。山奥に歓声がこだまします。



すいかパーティー（ベルクハイムにて、久富氏撮影）

秋の小屋作業では更にもう一名、2年生の内田くんが参加してくれました。なんと彼は、「ワンゲル60周年記念Tシャツ」のモデル。Tシャツ自体は現役生たちがデザインしたとのことです。来年9月の60周年記念式典が楽しみですね。



現役ボッカ隊。（2年）内田くん…僕らが作った「ワンゲル60周年記念Tシャツ」（久富氏撮影）

【6】OB 草刈り機隊

新道整備の先陣を務めたのが、OB 草刈り機隊です。草刈り機2台を使って、新道上部の濃密なブッシュを刈りこみながら少しづつ前進していきました。といつても草刈り機2台を荷揚げするのは結構大変で、初日はテント場C1（砺倉分岐の手前）まで行くのがやっとでした。初日はそこで現役生たちと一泊。本格的な作業を開始したのは2日目からでした。



OB 草刈り機隊（テント場C1にて、上馬氏撮影）

草刈り機の威力は絶大で、いったん作業を始めると、ギューン、ビシビシ、バシバシと、細い笹から太い灌木まで何でも切れます。この強力なツールのお陰で新道整備もかなり進みました。春と秋、2回の小屋作業を経ることにより、当面の目標としていた旧道分岐点をクリアし、最終的には高三郎ピーク（1420m）の直前、標高1320mまで到達することができました。あと残すところわずか。距離にして300mぐらいでしょうか。



標高1320mの眺望…剣岳、立山、薬師岳が見える



濃密なブッシュ帯を刈る上田さん…旧道分岐(左上)、高三郎ピーク(右上)が見えてきた(上馬氏撮影)



新道整備の最高到達点(1320m)…指さす黒崎さん

高三郎のピーク付近で夕方まで作業していると、明るいうちにベルクハイムへ下山することはさすがに不可能です。秋の小屋作業では分岐下の道上に第2テント場を切り開き、そこで一泊しました。その夜は月がぽつかりと高三郎の上へ。月見て一杯としゃれこみました。



高三郎と月(テント場C2にて、上馬氏撮影)

【7】感想と今後について

(1) ニセアカシアの伐採

冒頭で述べたニセアカシアの木。ベルクハイムへ倒れかかる前に撤去するのが無難かと思われます。OBに木こりさんは…いませんよね。

(2) 水没難所の迂回路

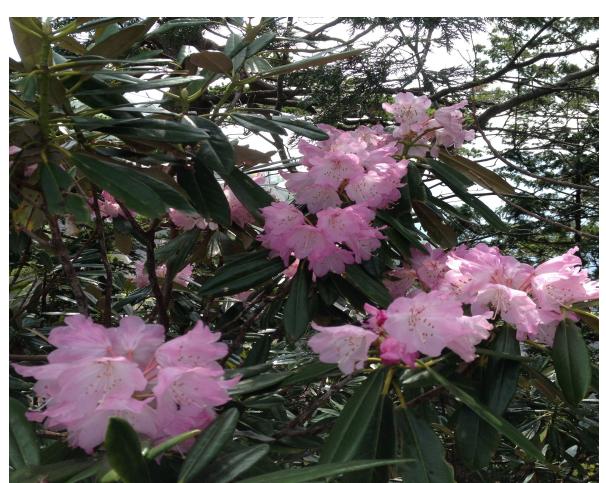
倉谷川沿いの道は、浸食がどんどん進んでいます。迂回路をそろそろ本気で整備する時期が来ているようです。ベルクハイムの横(トイレ側)からコムラ谷へ抜ける「高巻きの道」を整備し始めました。まだ不完全ですが、迂回路があれば安心です。急勾配な部分をジグザグにして緩やかにするなど、改善を施せばもっと歩きやすくなると思われます。梅さん、黒崎さん、お疲れさまです。



高巻き道の入口(ベルクハイム～コムラ谷を繋ぐ)

(3) 新道整備…目指せ、高三郎ピーク!

来年5月には、いよいよ高三郎ピークに到達かと思われます。余すところ300mほどのブッシュ。人海戦術で一気に突破しピークでお祝い。皆で感動を分かち合えれば最高です。その頃にはきっとシャクナゲも満開。僕らを祝福してくれることでしょう。



シャクナゲ満開(5月の新道、クラコシ尾根にて)

近畿支部報告

1. 京都・蹴上周辺 PW

(報告者 11期 加藤 忠好)

- ・実施日 2016 12/17(土)
- ・コース 琵琶湖疏水記念館～南禅寺・水路閣～ねじりマンポ～日向社～神明山～旧鶴巻邸～天智天皇陵～旧安祥寺舟溜まり跡～JR山科駅
- ・参加者 (12名) <§ : 夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫 §⑧⑩、藤井⑩、高田⑩、畔山 §⑪、加藤 §⑪、楠屋⑭、金井⑯、三宅⑮
- ・報告

京都は古都である。古いだけではない。西歐的歴史遺産もあり、古都らしいのは、それを大切に使い続けている精神だ。



<田辺朔郎の銅像と>

物流を水運に頼っていた当時、琵琶湖と京都を結んだのが琵琶湖疏水である。二つの峠の下、船を通す大きさの隧道を作る。当時としては問題の多い困難な技術であった。

それを若き日本人監督の下で日本人の手で完成させたのだ。一方、近代産業の動力源として、琵琶湖と京都との標高差を利用した水車を想定していたのを、実用的な発電機が開発されたことを知るや、いち早く水力発電に切り替えたのが京都である。日本初の市内電車が走った都市が古都京都であったのも面白い。

今回は8期伊豫さんと私の共同企画だ。まず、トイレ付き入館料無料という好条件の琵琶湖疏水記念館を集合場所とした。知識欲に駆られて早く来た人は十分予習ができたはずである。

金井さんの差し入れのアップパイを待って、10時半出発、10分後には南禅寺の三門に着いてしまった。南禅寺では法堂や水路閣を中心に、遅い紅葉を賞でることができた。実は、

水路閣に上れば、水路に沿って遡上できる散歩道があるのだが、土手の補強工事のため来年の秋まで閉鎖、仕方がない。



<南禅寺水路閣にて>

来た道を少し戻り、水力発電の導水管、インクラインの下を通り抜けるねじりマンポを見物、11時半頃疏水公園に着いた。ここより登り坂に入る所以、若き田辺朔郎の銅像の前でアップパイの大中小に興じた。

登りといつても舗道、バスも通れないような細い道の奥に日向宮がある。京都のお伊勢さんとも称される、隠れた紅葉地なのだ。11月末の下見に来た頃は紅葉の最盛期であったが、すっかりくすんでいた。建物は伊勢神宮と同じ茅葺の神明造り、小ぶりながら外宮と内宮、天の岩戸までもが揃っている。その岩戸を通り抜けて登山道に入った。

京都の東山というのは宗教じみた魔境もどきが多い。日向宮の裏手の山頂には「笠狭之御崎舊蹟」なる石柱があつたりする。ここには天孫降臨の日向のみならず、最初に宮を置いた場所までをも楽しめるのだ。自分が名所に行くのではない。近くに有名地を作るというのが、いかにも都会的である。心を神代に羽ばたかせながら、ここで昼食にした。



<ここが笠狭之御崎なるぞ>

歩いて数分で今日の最高所、神明山に着いた。最高地点といつても218mだから笑えてしまう。展望がないので、即出発。七福思案

處といふいわくありげな場所を通り約30分で山科側に下山した。これで京都側の疏水の第3トンネルの出口から登り、一山越えて第2トンネルの入口に下りたことになる。

近くには、土木・建築関係者にはよく知られた記念物が二つ、「本邦最初鐵筋混凝土橋」の石碑が建つ橋と「旧鶴巻邸」である。門外漢のわれわれには、「フヘン」というだけのものであるが、とりあえず記念写真。



<日本最古の鉄筋コンクリート橋>

すぐ近くに天智天皇陵があるので立ち寄った。陵であるが、壬申の乱以降になって作られたものであること。それを知るとこの壮大さは鎮魂に意味もあるのかなとも思ってしまった。

陵の裏から疏水道に戻り涸れた疏水（「疎」の字の方が適切か）に沿って歩いた。大きな櫻の木から土手を離れたが山科の盆地から相当高い場所に疏水が作られているのがわかった。（実は疎と疏は同じ意味だったよ）

山科駅16:50到着、もうすぐ冬至、夜の帳がすぐそこまで来ていた。山科駅前近くのトンカツ屋で乾杯をして別れた。

2. 琵琶湖疏水 PW

（報告者 11期 加藤 忠好）

- ・実施日 2017.1/21(日)
- ・コース 山科駅～旧安祥寺舟溜まり跡～四ノ宮舟溜まり～第1トンネル出口～普門寺～第1立坑～小関峠～長等神社～三井寺境内散策～第1トンネル入口～大津閘門～三高艇庫～京阪三井寺駅
- ・参加者 (11名) <§：夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫§⑧⑩、高田⑩、畔山§⑪、加藤T⑪、森川⑪、野村⑪、楠屋⑭、金井⑮、三宅⑯
- ・報 告

先月のPWは苦しまぎれの計画であったが意外と好評で、次回はその続きをとの要望があったくらいである。よって、その名もズバ

リの疏水PWとした。前回は疏水沿いにほとんど歩かなかったので、今回はなるべく疏水沿いの道を歩くように計画した。といっても長大な第1トンネルだけは無理なので、その工事のために使われた第1および第2豊坑を案内することにした。それと、このあたりには明治初期に刻された几号（キゴウ）水準点（ベンチマーク）なるものが多く残っているので、それも紹介し、一緒に捜すこととした。もちろん名所三井寺も外せない。

山科駅10時発、10分後には前回の大櫻に着いた。ここからが疏水歩きとなった。疏水に架けられた橋には名前がつけられているが、何故か疏水が安祥寺川の上を渡る立派なレンガ造りの橋は名を持っていない。疏水歩きの楽しみはそのような橋を見るのも含まれる。なんでこんな所にと思われる場所に架かっている橋は、疏水が通る前からあった山道だろう。それらはみんな土手からさらに橋を石段で登らせる三角橋という構造をしている。疏水が単に用水でなく、水運であったことの名残である。京都の高瀬川に架かる橋も、かつてはそうであったと聞く。



<疏水第五橋：三角橋となっている>

今朝は寒かった。山が白いのは霧氷だろうか。疏水の水は京都市民の水道水として使っている。こんなに水量が少なくて大丈夫と心配する人も居たが、ここのほかに第2疏水があり、こちらは工事中で水量が少なくて、第2疏水の方でまかなえているようだ。

第4橋である安朱橋は山科駅と毘沙門堂をつなぐ橋だ。橋を過ぎると、すぐに諸羽トンネル。疏水はここから流れ出るが、歩道は山裾を大きく迂回している。元来、疏水も山裾に沿っていたのだが、湖西線を新設するときに水路だけトンネルとしたのだ。疏水を埋めここに広い公園ができた。

秋の紅葉から春の桜の時期まで、京都人として暮らしている金井さんがアッポパイの名

品を持ってくれたので、諸羽トンネルの入口側、かっての四宮舟溜まり前で大中小を実施。不公平の平等に大いに笑った。

一方、このあたりの疏水道は京都府と滋賀県の境界となっている。その延長線の狭い道路上に、京都市と大津市の二都市のマンホールが並んであるという珍しい地点である。



＜左が京都市、右が大津市のマンホール＞

峠を越えていないのにここが大津市とは不思議な感じがするが、このあたりはかつて三井寺の所領であったことに由来するのだろうか。どこを歩いても歴史に遭遇するのが近畿である。

昼食は、疏水第1トンネル出口にあるコンビニ内のイートインスペース。下見時に、広さも充分、寒さも防げる所以即採用としたのだ。我々の年齢にピッタリの場所だった。

ここからは疏水はトンネル、人は峠越えとなる。煙突状の第2堅坑は民家の庭を覗くことになるので、ごく興味のある人のみに紹介した。第1堅坑は山道を登った所に大きく見えたが、京都市民の水源に直結しているので近寄れないのが残念。

小関越えの峠をはさんで、琵琶湖と山科側の藤尾、結果的には藤尾がやや低かったのであるが、よくぞ峠を越して水を流すことを考え着き、実行したものだ、と感心する。



＜怪しい人を寄せない第1堅坑＞

江戸期の用水の多くは川の上流から山麓を這わせ台地まで水を引いてきているが、琵琶

湖疏水の峠越しの発想は驚きに値する。トンネルを掘るという技術もそうだが、それ以上に測量技術の高さに驚くのである。

例の几号水準点も藤尾磨崖仏の石垣と小関峠を越えた等正寺墓地入口で見つけることができた。峠を越えたらしめたもの、のんびりと時間を過ごすことができる。

願いが叶ったのだろうか、長等神社の馬神様で一心祈っていた人が居た。入山料を払って階段を登るとそこは三井寺の観音堂であった。琵琶湖方面の眺望が素晴らしい。三井寺は見るものが多い。観音堂、毘沙門堂、微妙寺、唐院、三重塔、一切経蔵、弁慶の鐘、閻伽井屋、三井の晩鐘、金堂などを廻って仁王門を出た。寺で約2時間ほど過ごしただろうか、すでに4時を過ぎていた。護法善神堂前で羊羹の大中小で楽しんだ。



＜三井寺・一切経蔵の下で＞

三寺の総門から疏水の第一トンネルの入口、大津閘門、旧制三高の木造艇庫まで歩いたら疏水の旅もおわり。琵琶湖岸だ。かつて琵琶湖湖岸には四高艇庫もあったと聞く。艇庫には三高の校章が残っていた。今まで継承されている。羨ましいと思った。

3. 義経・鶴越Pw

(報告者 8期 黒崎 史平)

- ・実施日 2017.2.25(土)
- ・場所 神鉄藍那駅～雪御所跡(兵庫区)
- ・参加者 (16名) <§：夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫§⑧⑩、黒崎⑧、藤井⑩、高田⑩、畔山§⑪、加藤§⑪、上馬⑯、金井⑯、高村⑯、間所§⑯、三宅⑯

・報告

10時、神戸電鉄藍那駅(神戸市北区)に集合した。早めに着いた人は駅周辺に点在する宝篋印塔(誤伝紫式部の墓)や七本卒塔婆を見学していた。9時45分には全員集合。駅前は狭いので即出発し、藍那集落へ急坂道を登る。

坂道の途中にある農村舞台跡の小さな広場で、小休止がてら今日のルートなどの連絡を行う。加藤君の用意してきた多色刷りの地図が見やすくて便利だ。



<藍那集落・農村舞台跡の広場にて>

今日は1184年陰暦2月7日源平の戦の勝敗を決定づけた源義経の奇襲：鶴越の逆落しを行った際の道をたどる予定だ。

小広場からさらに急な道を上り、右に巻くと丘の上ながら斜面に水田がある。まだ冬の気配の残る水田をぬけて、稜線部の道に出会う。道の向こう側は昨年開園した藍那国営公園だ。境界の高い金網のフェンスが道沿いに続いている。この道を左にしばらく行くと高さ1.5m位の宝篋印塔がある。和泉式部の墓と伝えられているが、もとより誤伝で南北朝時代のものとされている。このちょっと先には藍那から直登してくる道が出会い、「藍那の辻」と呼ばれている。足下に小さな石の道標があり、「右あいな」、「左みき」と刻まれている。兵庫と三木を結ぶこの道から藍那への下り口を示したものであろう。義経は2月6日には藍那付近に到着していたよう、藍那から直登してくるこの道を地元では義経道と呼んでいる。



<伝 和泉式部の墓（南北朝時代のもの）>

しかしこの道を馬で上ってくるには無理があり、義経は三木方面から起伏の少ない丘の道を来たとする方が自然である。

我々は金網フェンスに沿って南東に進むと、まもなく浅い谷地の「相談ヶ辻」に着いた [11

時12分]。ここは義経が右折して白川に出るか、直進して鶴越に出るか軍議をしたと伝えられる場所でこう呼ばれている。右方面の森に入る道の入口には白川方面を示す小さな道標が掛けられている。

一休みした我々は鶴越方面に直進する。まもなく森の中の尾根道は突然ひらけ、星和台の新興住宅地に入った。両側に歩道のある舗装道路を南に20分程で抜けて、信号を渡り、鶴越墓園に入った。ここから先は墓園造成工事により古道は削り取られているが、所々地蔵院や蛙岩の旧跡に古道の気配を伺うことができる。平坦な墓園の外周路を南にひたすら歩くこと30分、高尾山山頂への登り口に着いた。ここには古道時代からの地蔵院があり、いくつもの言い伝えが残っている。極めつきは「義経駒繫ぎの松跡」である。現在切り株のみ残っているが、切り口の年輪からどう見ても100年は超えていない。800年以上前から生きていたとは考えられない。

高尾山の山頂で昼食となる[12時30分]。



<高尾山 403m 山頂にて 背後は神戸市街地>

春霞で遠くの山が識別できなかったが、山頂からは神戸港方面や明石海峡大橋がよく見えた。双眼鏡を取り出して展望を存分に楽しんだ。

地蔵院まで戻り[13時20分]南下した後、古道と言われる踏み分け道へ入って5分、そこには岩盤が露頭していた。複雑に風化した大岩は下から見上げるとガマガエルの頭に見え、「蛙岩」と呼ばれている。興に乗り岩の上で印を結ぶ人がいた。児雷也になった気分であろう。古道から再度墓園に降りてトイレ休憩をとり、車道を下り南ゲートを抜けると広いバス道路に出た。ここには史跡鶴越と刻んだ石碑が建っている。一般に、義経はこの先ひよどり展望公園から長田付近の鶴越町に下ったとされる。

しかし、この道は江戸時代に作られた道で、

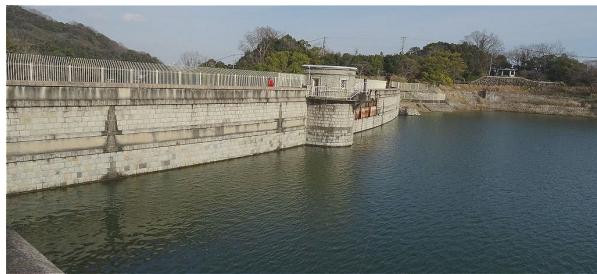
逆落としする難所もなく、義経逆落し道からは除外されている。鶴越古道は神鉄鶴越駅付近から鳥原谷に入り、石井町に通じていた。我々もなるべくこれに沿って下り、鶴駅前の踏切を渡る。



<神戸電鉄・鶴越駅の別れ>

ここで高村さんと高田さんが電車で帰途につかれた。山中の無人駅で上りと下りホームにそれぞれ一人ずつ立っている構図は映画の1シーンの様だ。

我々は鳥原方面に狭い石段を下り、鳥原水源池に出て、回遊路を立ヶ畠（たちがはた）ダムに向かう。立ヶ畠ダムは神戸市の水道水源として明治38（1905）年に竣工した日本で4番目に古い重力式ダムで、国の有形文化財に登録されている。ダムの建設により鳥原村（98戸 414人）が水没した。離村するに当たり村人は線香の材料作りに使っていた石臼を記念に残し、石臼はダムの護岸に使われている。ちなみに最古のダムは新神戸駅の奥にある布引五本松ダムで1900年竣工とか。ダムサイト着15時10分。



<立ヶ畠ダム M38年竣工>

しばし、アーチ状にカーブする堤体、ダム湖右岸の石垣内の石臼、下流側の減勢工などの風景を見た後、小休憩とし、羊羹の大中小などを楽しんだ。

鳥原村を通る石井川沿いには古道鳥原越道があり、かつて、平清盛が毎月この道を通り丹生山へ月詣をしたと伝えられている。この古道の下流側は深くて狭い谷地形となり、市

街地へと抜ける。しかし義経はこの谷を通るのは避けたと考える。両側の崖の上から攻められれば避けようがなく、谷の出口では平家軍が待ち構えている。尾根を南側に越えて50mほど進むと、視界が急に開け、足下から急斜面が落ち、市街地が一望される。200m位先には栗花（つゆ）の森の大エノキが落葉中ではあるが見てとれる。さらに200m位その先に雪の御所（清盛の別荘）跡と言われている湊山小学校もはっきり確認できる。ここから足下の目と鼻の先に、街道を固めて平家軍がいたのは想像に難くない。ここからなら、平家軍の横に不意を突く事ができる。我々は栗花の森を目指して急勾配の階段を駆け下りた。と言いたいが、階段の手すりにすがり、互いに間を空けて、そろりそろりと下りていった。まさしくここが逆落としの場所に違いない。



<栗花落の森を伝えるエノキ>

狭い路地に入ると幹の直径が約1m、梢の先までは測れない位の大きなエノキが2本そり立ち、その間の奥に祠がある。横に延びた枝は周りの家の屋根にかかるように切られているが、上の方はまっすぐに伸びて一説には高さ20mと紹介されている。

小さな祠には白滝姫が祀られている。奈良時代、山田庄（現在の北区）の若者山田真勝が朝廷に仕えていた時、身分の違う白滝姫と結婚を許された。山田庄に姫を連れて帰る際、山陽道から鳥原谷越道に向かう入口辺りの森で一休み中、梅雨の季節にもかかわらず日照り続きで村人が苦しんでいる事を知った姫が杖を突き立てるとそこから清水が出てきた。真勝はその後栗花落（つゆ）姓を賜ったことから、この森は栗花の森と伝えられている。つまりここには1200年以上奈良時代から街道があったのだ。

ひとしきり見物した後、石井川に出ると川

中の石にカワセミがいて、あまり動かない。早速撮影タイムとなった。上流側へ下流側へと追っかける。石井橋を渡り、今日の終点：湊山小学校に着いた[16時15分]。校門横の雪見御所(平清盛の別荘)跡の碑を見て、「おごる者久しからず・・・」平家物語の一節を思いだした。

16時25分、無事解散となった。一部の人は石井川に沿って下り「トシヤ」に向かう。一部は湊山温泉や平野温泉を見て、平野の交差点で各方面のバスに分かれた。

4. 宇治・天ヶ瀬PW

(報告者 15期 三宅 豪)

・実施日 2017 3/18 (土)



<大吉山展望台からの平等院>

- ・コース J R 宇治駅=(京阪バス)=くつわ池自然公園～六石山～天ヶ瀬ダム～興聖寺～大吉山(仏徳山)～宇治上神社～J R 宇治駅 (歩行距離 7キロ)
- ・参加者 (13名) <§ : 夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫 §⑧⑩、篠島⑧、島林⑩、藤井⑩、畔山⑪、加藤 §⑪、森川⑪、上馬⑯、金井⑯、三宅⑯
- ・報告

宇治と言えば世界文化遺産平等院や宇治茶、源氏物語の町など観光名所ですが、宇治川上流には意外に知られていない自然あふれたハイキングコースがあると知り PWを計画しました。

J R 宇治駅 10時集合だったが早く着いた金岩さん、藤井さんは平等院拝観に行かれた。元気です。10時29分発の京阪バスで15分くつわ池バス停到着。

くつわ池は灌漑用のため池だったようで、馬のくつわに似ているらしいがよく分からぬ。くつわ池自然公園は広大な敷地にキャンプ場やロッジなどがありファミリーに人気があるようだ。公園に入り緩やかな登り 15分で展望台。

鷲峰山など山城の山々や宇治田原の町が良く見える。ここで昼食。金井さん差し入れのアップルパイ(アップルパイ)で恒例の大中小じやんけん。



<六石山展望台にて>

シニアが大騒ぎ。展望台から30分の緩やかな登りで本日の最高峰「六石山」(366m) 展望無し。六石山(ろっこくやま)は三角点の名前が末山となっている。この辺りは三つの自治体の飛び地になっており呼び名が違っているようだ。六石山からは緩やかな尾根道を下る。

歩きやすく頬にあたる風が気持ちいい。時々長岡京から山崎あたりの高速道路や天王山、北摂の山々が見える。右手に青々とした水をたたえる天ヶ瀬ダム湖(鳳凰湖)が見えてくる。六石山から約一時間 14時天ヶ瀬ダムに到着。天ヶ瀬ダムは昭和39年完成のドーム型アーチ式コンクリートダムで高さ73m、長さ254m。結構巨大なダムで驚いた。



<宇治川本流を堰き止めている天ヶ瀬ダム>

ダムの上をゆっくり見学。観光客を避けてダムを眺めながらまたまた大中小。今度はかまだ羊羹だ。誰も恥ずかしがらない。15時天ヶ瀬ダム出発。

宇治川沿いの散策道路をのんびりお喋りしながら歩く。30分ほどで興聖寺入口。琴坂と言う風情ある石段を登り興聖寺の庭園を拝観。紅葉と桜が綺麗らしい。

興聖寺は1233年道元が開創。曹洞宗最初の

寺院で山号は仏徳山で大吉山とも呼ばれる。
なぜ大吉山と呼ばれるのか?わからない。



<興聖寺竜宮造りの山門にて>

興聖寺から急登 30 分。16 時 15 分大吉山展望台到着。頂上は展望がないと聞いていたので殆どの人は頂上には行かなかつたが、金井さんが大吉山頂上まで登ったのには驚いた(笑)。大吉山展望台からの眺望は抜群。宇治川を挟んで平等院や宇治の街並が良く見える。

大吉山展望台から下り 30 分で世界文化遺産「宇治上神社」16 時 45 分到着。丁度拝観時間が終わった所で残念ながら拝観出来なかつた。ここから「さわらびの道」と呼ばれる源氏物語散策の道を通り宇治橋へ。橋の袂の梅の木にたくさんのメジロがいて写真撮影。JR 宇治駅前のビアホール「ロッキン・ハーツ」に向か重い足取りで進む。



<ロッキン・ハーツで打ち上げ>

早く生ビールを飲みたい。17 時 50 分到着。ボリュームのあるチキンやフィッシュ料理をあつという間に平らげる姿はまだまだヤングです。19 時 10 分 JR 宇治駅にて解散。歩行距離 7 キロ程度のコースだがアップダウンが結構あり最後は足が重かった。山歩き、ダム見物、世界文化遺産の神社仏閣など見所も多彩な PW だった。

5. 法隆寺～矢田寺 PW

(報告者 11 期 加藤 忠好)

・実施日 2017 4/15(土)

・コース JR 法隆寺駅～吉田寺～藤ノ木古墳～法隆寺境内～松尾道～松尾寺～松尾山(315m)～展望台～矢田寺～横山口バス停～近鉄郡山駅

・参加者 (9名) <§ : 夫婦で参加>

金岩⑤、藤井⑩、畔山 K⑪、加藤 T⑪、森川⑪、上馬⑯、宇野 §⑯、三宅⑯

・報告

誰かが山行きの企画をしてくれれば参加しますよといつても、その企画提案となるとなかなか手を挙げてくれるのが現実だ。



<藤ノ木古墳にて>

それでも、事前調査、下見などを含め慣れれば、なんでもないことでも、やりつけていると面倒である。この会のように、参加者の技量、体力、性格などについてお互いよく知っているので、何とかなるだろうという安堵感があつてもそうなのだから、便利かつ経済的理由から業者企画のツアーダンジョンが成立するのもうなづける。

思い起こせば、ワングル現役時代もオープン登山と称して、一般学生を白山に案内し部の主要な収入源としていた。

今回は、10 期藤井さんが滋賀県の雪野山あたりで計画しようかとの申し入れがあったので、安心しきっていた。が下見の結果からは、ちょっと中途半端だから止める……といわれたときには、はたと困った。しかし、奈良・矢田丘陵の南部の矢田寺、松尾寺、法隆寺あたりで再度計画するとの連絡で、また安堵した。かように企画していただいたのに、2 日前での降水確率が 50% で心配。それが前日には 20% となり、藤井さんから実施連絡があり、また安堵した。

JR 法隆寺駅に 9 名が集合、直接法隆寺の方に行く予定が、早くから来ていた金岩さんがお年寄り向きの寺を下見してきたという。道

がわかるならばと、企画の藤井さんもOK。急遽ぽっくり寺が加わった。



<ぽっくり寺として名高い吉田寺>

正式には吉田寺(キチデンジ)であるが、通称名の方がよく知られている。JR 法隆寺から旧道で西へ、途中から自動車も通れないような道を行くと、吉田寺の標識が出てきた。拝観料 300 円を納め境内へ入る。三重の塔も室町時代のもので重要文化財だ。4月も 15 日。例年ならば桜は終りだ。しかし今年はまだ残ってた。

ここから北へ歩く。紅葉で名高い龍田神社があった。今の季節はさしてみるものがないので、法隆寺の西にある藤ノ木古墳へ急ぐ。このあたりは昔ながらの細い道が多い。時には畦道を歩き古墳に到着。この古墳を有名にしたのは、石棺が未盗掘石棺のままであったことだ。発掘物は国宝に指定されている。

藤ノ木古墳をグルッと一周し、土塚と民家に挟まれた風情の良い道を東に進み法隆寺の西大門に着いた。地元の中学生が通り抜けていく。正門の南大門、東院伽藍に続く東大門は観光客が多いのに、ここは普段の顔をしているのが心地良い。門を入ると法隆寺独特のゆったり感が広がる。

拝観料のいらない西室、金堂や五重塔がある西院伽藍の廻廊の外側に沿って歩いた。



<法隆寺・西院伽藍の東室あたりにて>

真中に柱のある中門は、梅原猛の隠された

十字架の象徴的な建物だ。東室あたりで雨がポツポツ。これから登山というのにいやな予感がする。法隆寺での時間つぶしはいくらでもできる。さらに東門まで来たときに、風雨はおろか、空風が吹き、大きな看板が飛ばされ、上馬さん目がけて襲いかかってきた。とっさに避けることができたのは、日頃の山行いで培った判断のよさと敏捷性のお陰であろう。

雨の中、さらに東院まで行った。拝観も考えたが海外の観光客が多いので、一旦桜を見ながら、風と雨を避けながら、立ち昼食を摂ることにした。



<西院伽藍から東院伽藍への道>

昼食を終えると、暗雲が消え去り太陽がほんのり差してきた。なんという幸運。迷うことなく気持ちを登山に切り替えた。



<日本最古の厄除け靈場 松尾寺>

法隆寺の北側の山が矢田丘陵である。斑鳩神社を過ぎ、法隆寺CCに入るあたりが松尾寺への登山口だ。13時出発。昔は主要な道であったろうが、今では完全な山道である。喘ぎあえぎ登り、約 40 分で松尾寺の北惣門に着いた。惣門の内側の清水で喉を潤した。松尾寺の中は桜花が絨毯のように敷き詰められていた。

松尾寺の由来では、舎人親王が 42 歳の厄年であったのと日本書紀編纂の無事完成を祈りこの寺を建立したとある。よって、この寺は日本最古の厄除け靈場であるそうな。

裏にある松尾山 315m が今回の最高点。山頂には電波塔があるだけで展望はまったくダ

メ。ほぼ稜線伝いにつけられた林道を北に約15分歩いた展望台からは奈良盆地が眺められた。



<展望台からの奈良盆地>

春霞の中に、興福寺の五重塔や東大寺の二月堂が見えた。矢田寺までは急な下りを避けたが、それでも結構な下りだった。途中、弘法の井なるものがあったが、その水を飲んだ金岩さんの言によると、松尾寺の水の方がおいしかったとのことであった。

矢田寺も桜の絨毯であった。矢田山金剛山寺というのが正式だが、矢田寺のほうが通りがよい。また、あじさい寺ともいう。矢田寺は、大海人皇子のちの天武天皇が関与しての創建で、壬申の乱とも関係している。当初、十一面觀音と吉祥天女を本尊としていたが、平安初期に地蔵信仰に変わった。その伝説も小野篁や裁きに悩む閻魔様などが出てきて実に面白い。



<面白い伝説を持つ矢田寺>

矢田寺に着いたのが16:20頃、寺からバス停も遠く、本数の少ないバスに乗るべく、少しの休憩だけで寺を辞した。

大和郡山の居酒屋で今日の天候と無事に感謝し、桑名から参加した森川さんと19時半ごろ別れた。

6. 大和三山PW

(報告者 5期 金岩 孜)

- ・実施日 2017.5.13(月)晴
- ・場所 大和・耳成山、藤原宮跡、畝傍山他

・参加者(15名) <§ : 夫婦で参加>

金岩⑤、伊豫⑧⑩、高田⑩、畔山⑪、加藤⑪、森川⑪、赤地⑫⑭、楠屋⑭、宇野⑮、三宅⑯

・報告

ゴールデンウィークの喧噪も一段落した一日、本年第5回目のPWが大和の藤原京跡とそれを囲む大和三山の内、耳成山と畝傍山(何れも死火山)の二山などを巡るコース設定で実施された。

企画・引率者は5期の金岩本人。年初のPW打上げの場で2年前に某OB仲間と歩いた大和三山の話を口走った所、意外にも多くの賛同者があり企画することになったのだ。



<藤原京 朝堂院南門跡 背後は耳成山>

大和三山はウォーキングに関心あるウォーカーにとってよく知られたアイテムで、何れも標高200mに満たない低い山々なので、その気になればいつでも巡れる所なのにである。実は企画者本人も2年前に初めて巡ったのだから、大きいことは言えないのではあるが…。

友人と来た2年前は耳成駅集合だった。今日の集合地は大和八木駅なので、耳成山までのルート確認を行うべく集合時刻の約1時間前に八木駅に着き、下見を行った。今回の歩き出し路でのトラブル発生回避を図ったのである。

集合時刻までに全員集まり、準備体操を兼ねて先導しながら歩き出した。暫く歩くと早過ぎるとの忠告。引率の私は既に準備運動を兼ねた下見で足も軽くなっていたらしい。

耳成山(139m)登山口の公園にはゞ予定通り到着、この日のコース概要等の説明を行って上り始めた。散歩道を歩くように楽々道の方を上っていく近在らしき人も何人か見受けられた。一方、我々はワングル精神もあって登山道の方を選んだのだった。その結果8合目の耳成山口神社に到達する前に列が思った以上に延びていて、2枚目のイエローを受けたのだった。

神社で一日の全員の安全と完歩を祈願し、山頂に向かった。山道が続くルートながら5

分弱で山頂に着き、この日の1山目の全員登頂が出来た。



<耳成山登頂記念>

耳成山は小高い丘の様でありながら一応山であり、三角点も確認できた。樹間から金剛葛城山系を望見し、記念写真も撮って下山。次の目的地の藤原宮跡へと向かった。

藤原宮跡までは1km強の距離ながら、途中の醍醐町環濠跡や醍醐池土手にある四等三角点(72.6m)や観音像を見学しつつだったので、到着は昼になっていた。

平日で夏日的気温だったので、他の入場者は少なく我々は木陰に陣取ることができ、まずは昼食、そして森川宗匠による野点。途中で火気厳禁の忠告が入ったが、風そよぐ中、三山の姿を眺めつつ美味しく味わった。万葉の人たちも、このようにゆったりとお茶などを口にしたのではなかろうかとの思いを馳せながら…。



<藤原京跡 背後は天香久山>

色とりどりのコスモスが一面に咲く秋の頃は、更に印象深くなることだろう。

お腹も落ちていたので、周りを見渡す余裕も湧き、宮跡内を巡ることになった。

ご存知のように藤原京は平城京に先立ち、唐の長安を模した日本初の本格的な都(平城京や平安京を凌ぐ規模で5.3km四方の広さだったといわれている)として造られ、持統天皇(41代)、文武天皇、元明天皇の3代16年間(694-710)統治の中心であった。

この日は藤原宮跡の大極殿跡、朝堂院南門

跡の多くの再現列柱や朱雀大路跡などを大和人になった気分で見学できた。

この後は藤原宮南大門の両翼に鎮座するペア寺院の内、本薬師寺跡への直行が通常だが、今回は片方の紀寺跡にも立寄った。

紀寺跡前の道路(藤原京の八条大路)脇の案内板では奥まった所の芝生地が寺跡であるとのことだったので、時間の都合もあり案内板の説明文に目を通し画像に収めたのみで後にした。そして本薬師寺跡(西ノ京の薬師寺の前身)へ。

天武天皇が皇后(持統天皇)の病平癒を祈念して発願された寺院の跡である。巨大な礎石群を借りて腰を下ろし往時の姿を偲びつつ小休止。夏場であれば隣接農園のホティアオイ大群生を鑑賞できる地でもある。



<旧本薬師寺の礎石>

元気を回復して畠傍山(199m)へと向かった。畠傍山は三山の中で最も高く、香久山と耳成山が当山をめぐって歌詠みして争ったことも知られている。

時は既に15時過ぎたが、5ルートある登山路の中で、高齢者ながら元気集団の我々は最長の神武天皇陵や畠火山口神社等を経由するルートを選択、勇んで歩を進めた。平日の夕方近くだったこともあり、神武天皇陵への参拝者は他には数えるほど。



<神武天皇陵にて>

型通り参拝して記念写真撮影後、山麓周回路(入口が見つけ難い)に踏み入った。同行者

たちの協力もあって畠火山口神社に無事到着、登山の安全祈願を行って登りについた。



<畠火山口神社側の登山口にて>



<畠傍山登頂記念>

20分弱でこの日の2山目も無事全員登頂できた。

大中小休憩や三角点の確認、樹間からの金剛・葛城連山や大和側の藤原宮跡・耳成山・香久山等の展望を楽しみ記念撮影後、今度は歩き易い北参道登り口へのルートを下った。途中、東大谷日女命神社を横目で認めつつ通過、全員無事下山できた。畠傍山をほど一周したのだった。

檜原神宮の森閑とした空気に身を清められつつ北神門から南神門へと、閉門時刻が迫る中、境内を通り抜けた。内拝殿から幣殿頭上に西に傾いた淡い照りの太陽が優しく微笑むように浮かんでいて印象的だった。



<檜原神宮北神門>

深田池経由で檜原神宮前駅へと向かい、駅前の宮崎市との縁で設置された「幸せの黄色いポスト」の脇を通って駅構内に入り、馴染みの居酒屋「きはる」で打上げして解散・帰途に

ついた。

今回は大和三山の内、二山を巡ったが、残りの香久山登山をコスモスと併せての希望も多くあり、機会を見つけて企画したいと思っている。

また、参加の皆さんからの心温かいご協力によって今回のPWを予定通り無事終えることができ、感謝一杯の一日だった。どうもありがとうございました！

7. 霊峰生駒・水と仏を巡る極楽Pw

(報告者 12期 赤地 賢一)

・実施日 2017 6/19(月)

・コース 近鉄瓢箪山駅(徒歩 or タクシー)鳴川峠登山口～水車小屋跡～神感寺～森のレストH～展望台～鳴川峠～千光寺～清滝石仏群～音の花温泉～近鉄東山駅

・参加者 (13名) <§ : 夫婦で参加>

金岩⑤、伊豫 §⑧⑩、藤井⑩、畔山 §⑪、加藤 §⑪、赤地⑫、楠屋⑭、宇野 §⑮、三宅⑯

・報告

9:30 近鉄瓢箪山に13名の顔ぶれがそろいました。梅雨入りしたのに、今日はぽっかり晴天。さすが近畿の晴れ男 15期三宅のご威光恐るべし。



< {シルバー派} と {青春派} との出会い>

今日は東大阪から登り、鳴川峠を越えて奈良県側へおりるコース。

難波と大和の境にある生駒連山は、日本書紀にも表記があり、古来より山岳宗教的雰囲気を持つ靈山として歴史に刻まれてきた山です。

初っ端の駅前から分派です。 Why ?

計画時、某氏曰く。「夏に向かう時期なので、シルバー世代のことを考え、駅から登山口までタクシー可の {シルバー派}、暑さにめげず歩く人は {青春派} としましょう」と。

山行後の某氏のメール曰く。「驚きましたね。

青春派を名乗る人が、かように多いとは！！夢幻かと思いましたよ。清純派としておけば、もう少し減ったかも・・・」

ということで、標高 160m の登山口で両派合流。10：37 登山開始です。

(このときサングラス事件発生：※1)

ほぼワンピッチで水車小屋跡に到着。朝どれ胡瓜を支給。まっすぐ登れば鳴川峠ですが、それでは即奈良県側に下ることになるので、そこは老いたりと言えども元KUWVの面目もあり、左の“石畳の路”を神感寺めざして登ります。

生駒山は、大阪側からはかなり急峻な登りです。八重姫龍神にも参拝して 11：39 八大龍王神感寺着。

山上にも拘らず、かつて南北朝時代には壮大な伽藍を擁していた遺構があります。



<神感寺山門にて>

“お待たせしました”お昼はここから 10 分登った「森のレストハウス」でいただきました。食後デザートのアイスクリームもふるまわれ、元気回復。



<ぼくらの広場展望台 525m >

5 分登り府民の森“ぼくらの広場”的展望台 525m からは大阪湾、六甲山、淡路島、奈良飛鳥、吉野方面などダイナミックな見晴らしと爽やかな風を楽しみました。

ここからは生駒連峰の縦走路をたどり、快調に鳴川峠にあります。13：37 鳴川峠着。

信貴生駒スカイラインの下をくぐれば奈良

県です。足どりも軽く（軽すぎて一回転事件発生：※2）櫟(いち)原川の渓流沿いを下り、14：22 千光寺に着きました。開基は役の行者。



<山深い千光寺山門>

大峰山（山上ヶ岳）を開くまでは、ここで修行をしたため、寺周辺を「元山上」と呼び行場は今でも残っています。ならばとて、行場の一つ“鎖場”に挑戦。晴れ男の三宅氏は元体操部の面白躍如、クリア。残りの中から 5 期金岩会長がチャレンジ。御立派！！でした。

鳴川の民家を抜け、渓谷に入るとそこは幽しい境。八尺地蔵（鎌倉時代の磨崖仏）の微笑に癒され、なお歩くこと 40 分、谷一つ、田んぼの畦道伝いに越えれば、日本 100 選にある“音の花温泉”に着きました。16：04

お疲れ様でした。露天風呂につかった後は打ち上げです。酔っぱらっても“没問題（No problem）！”近鉄東山駅は徒歩 3 分の距離ですから。

※1：タクシーの下車地点らくらくセンター H に高級サングラスを置き忘れ、登山口から伊豫さんと走り戻ったが見当たらず……と思いつきや、昼食時に旦那のザックからポロリと発見。いとミステリーな事件。

※2：鳴川峠からのゆるやかな下りで、木の根につまずき、一回転した事件。

《加藤⑪期》晴天に恵まれた今日一日ありがとうございました。下界では、さぞ暑かったんだろうと思いますが、山上の木陰は涼しかったですね。それでも風呂に入ったら頭が塩辛かったので、かなり汗をかいていたようです。また、智美さんの足は、家に近づくにつれて痛くなつたと言つていますが、長年のシャーロックホームズ的緻密な観察から、それはサングラス事件をカムフラージュしているのだらんでいます。ということで、みなさんが安心を。

『金岩⑤期』大阪では今年初の猛暑日になっていたようですが、生駒の山中では木々の茂っていた所が多く結構楽しく歩むことが出来ました。緊急アラート時の対応訓練、赤地劇場の公演、行場での古式体力測定など赤地さんならではのバラエティーに富んだ例会でした。あの岩場での失態は大いに反省している所です。靴ひもをしっかり締め直して取り掛かるべきでした。



〈行場に挑戦する金岩さん〉

『藤井⑩期』梅雨時の難しい時期なのに爽風快晴下、実に気分の良い1日でした。炎天下ずっと木陰で行けるコースというのも珍しいのでは。往時を思い出させる赤地さんの負荷力のおかげで、道中おいしい目に会いましたね。加藤家の賑やかな話題提供力に楽しかったですと言ったら叱られるな。打ったところは大丈夫だったんでしょうね。なんと言っても三宅さんと金岩さんの修験者ぶりを下から見られたのが一番でした。脱帽の一言です。

『三宅⑯期』生駒山は日陰も多く快適でした。展望あり渓流あり田畠あり岸壁あり神社仏閣ありの変化に富んだコースを案内いただきました。特製ジェラートは冷たくて色々な物がはいっていて感動でした。美味しかった！



〈下山後かつ風呂上りのビールはうまい〉

音の花温泉の露天風呂は解放感一杯で気持ち良かったですね。生ビールも最高でした。あんなに美味しいビールは久し振りでした--(笑)。いつまでも元気で陽気な皆さんとの活動をこれからも大切にしていきたいですね。

こんな仲間はそうそうないですよね。秋10月のサンマパーティーでまた皆さんと騒げるのを楽しみに、暑い夏を乗り切ります。

『畔山⑪期』空梅雨の、30度を超える暑さになった下界から、400m～600mの高みに誘ってもらえて最高でした。木々の影で吹く涼風や、大阪の街並みを一望するぼくらの広場での乾いた風が、心地よかったです。また、食後のアイスクリームは格別でしたね。

『伊豫⑧期』昨日は1日楽しく過ごさせていただきありがとうございました。赤地さんの健脚にもびっくり。もうみんなが高齢者の仲間入りなので少しきつかったかも。生駒もなかなか素適だとしりました。

『宇野⑯期』一汗二汗かきましたが、小陰も多く、楽しいコースを有難うございました。あの食後のデザートの写真を撮り忘れた事を後悔しています。(作るお手伝いで手一杯でした)凍った牛乳やジュースのパックがたくさん出てきて、びっくりしました。



〈山上までボッカした特大アイスクリーム〉

暑い時期の良いデザートですが、重いし、準備が少し大変ですね。堪能しました。

『ps 加藤⑪期』宇野さん、それにしてもあっちゃんは強いですね。赤地さんにバッチャリ付いていくのに対し、私しゃ、水車小屋跡からの登りで落伍しました。昼食をはさんで元気になりましたが、あれで、瓢箪山駅から歩いていたら、奈良県までいけなかったでしょう。私の判断の正しさを褒めたくなりました。

8. 続大和三山Pw

(報告者 5期 金岩 孜)

- ・実施日 2017 10/11 (水) 晴
- ・場 所 大和・安倍文珠院、香久山 (152m)
おふさ観音、今井町他
- ・参加者 (8名) <§ : 夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫 §⑧⑩、高田⑩、畔山K⑪、加藤 §⑪、楠屋⑭

・報 告

本年5月に大和三山PWを実施し耳成山と畝傍山の二山を巡ったが、「残りの一山(香久山)をも巡りたい」の要望に応えると同時に、先のPWで鑑賞できなかった藤原宮跡の大コスモス園をも巡る案をベースに、コースのより充実化を図る手立てを考えていた。そして明日香の彼岸花祭り見物等で桜井駅・観光案内所に立ち寄った。安倍文殊院～天の香久山～藤原宮跡～おふさ観音を巡るコース(大和長寿道)を「大和ぼけ封じ霊場巡拝」と名付けたJRが作成したパンフレットを陳列棚で見つけて入手、事務局の支援を得て、実施に移すことができたのだった。

募集期間が短く、また行楽時期と重なっていたこともあって、参加人数は8名に留まったが、晴々男のM氏欠席にも拘わらず、参加した晴男女の合力によって好天、それも夏のような暑さを伴った青空の下でのウォーキングになった。



<コスモスの咲く藤原京跡 背後は天香久山>

実施当日、集合地のJR/近鉄桜井駅前に集合時刻までに全員が揃ったので出発。晴天は良いが、日射しが10月にしては強く暑くなりそう。

桜井市は「芸能発祥の地」、「万葉集発耀の地」、「相撲発祥の地」や「仏教伝来の地」として駅北側広場に木製塔を建ててPRしていた。

歩き始めて10分ほどで最初の目的地の「桜の井」に着いた。メジャーな観光地ではないが、「桜井」の地名の起源になった井戸で、是非案内したかったスポットであった。履中天皇が磐余池に行幸になり、「桜の井」の水を召し上げられ、これを賞美されてより「桜井」の地名となったという伝承もある。

次は約100m先の磐余稚櫻宮伝承地と言われている「若櫻神社」に参拝し先を急ぐことにした。



<桜井の地名の由来はここから>



<桜井公園の一角にある土舞台>

しばらく進み、案内表示に従って右折した所、予想外の急坂に出合い驚きつつ登りきると「安倍山城跡」と隣接の「土舞台」に至った。土舞台は聖徳太子が少年たちを集め伎楽を習わした地で、桜井が「芸能発祥の地」と呼ばれる由来の所である。

そこを後にして、複雑に曲がりくねった細い道を歩み最後に民家脇の道を進むと古墳に行き着いた。「艸墓古墳(ハシバカ)」、別名「カラト古墳」である。7世紀中頃の築造とみられる方墳で、長辺約27m、短辺約21mの戴頭長方錐形である。横穴式石室に竜山石製のくりぬき家形石棺が安置され、有志は石室に入って手で触れつつ観察した。



<頭のボケ封じ寺、安倍文殊院>

次は日本三文殊第一霊場の安倍文珠院。本尊は日本最大7mの文殊様。知恵の仏様で知られ、「頭からのボケ封じ」の仏としても信仰厚い。共通拝観券特典の「お抹茶・菓子」のサービスや「長寿道完歩の証」スタンプ台紙を受け取った。お抹茶は頭がスッキリする効能があるとのことで、美味しく頂いたのだった。

コスモスも彩り豊かに咲いて秋を味わうこともできた。本堂に安置の本尊に願掛けして下山、後にして。

20分程歩くと稚桜神社(ワサカラ)に着いた。神社名は履中紀3年、履中天皇が宮の名を磐余若桜と名付け長真胆連の姓を稚桜部造と、余磯を稚桜部臣と改めたのが由来とのこと。

既に12時半を過ぎていたのでランチ休憩も考えたが、「西井みるく工房」に魅せられて直行する意向を感じ、歩き続けた。熱中症を心配しながらある。そして到着。早速、冷たいミルクや冷菓を口にして疲れを癒し生き返った。

空腹感や喉の乾きも落ち着き当日唯一の山、天の香久山への登りに取り掛かった。「天井と地上をつなぐ聖なる山」が由来の山名。天皇が頂上に登り国見の祭事をした神聖な山もある。先ずは登山口手前の天照大神が岩戸がくれされた所の伝承地である「天岩戸神社」にお参りしていよいよ登り始めた。10分程度の登りで最高標高地(152m)にある「国常立神社(ケトコタヒ・・)」に登り着いた。



<天香久山山頂の社>

祭神は国常立命で俗に雨の竜王と称され、境内社として高?神(タカラガミ)(竜王神)を祀っている。西方が開けており畠傍山方面が展望良く眺めることができた。北側山道を少し下ると祭神が櫛眞命(クシマヒコト)で、神意を伺う占いの神の「天香山神社」に出合った。国家の大事を判断する亀卜や、天皇陛下即位の大嘗祭に行われる神?田卜定に関わる神として重ん

じられてきた神社である。もう一つのおまけは、一度里まで下り登り返した所にある「月の誕生石」参拝である。高さ1.5m、幅6m、奥行3mの花崗岩で円形黒色斑点は月の産湯。小さな斑点は月の足跡と伝えられ古くから信仰する人も多いと云われている。



<腹帶を持つ「月の誕生石」>

この香久山は三山の中で最も姿が分かりにくいが、巡る所が多く印象深い山になった。

ここからは平地歩行になり、約20分で5月のPWでも巡ったことのある「藤原宮跡」に踏み入った。



<藤原京跡 背後は耳成山>

コスモスの大花園を期待していたが、残念なことに2-3区画のみが見頃であって、大半の区画は咲き始めの段階だった。ここでも記念写真を撮り、先へと急いだ。

R165を越えて数分西進すると最後の参拝予定地の「おふさ観音」に行き着いた。大和隨一の観音霊場と呼ばれ、諸々の病気を取り除くと共に「身体からのボケ封じ」の仏として信仰厚い本尊の秘仏十一面觀世音菩薩に願掛けをすると共に境内の日本庭園や薫り高く咲いたバラの花園を回遊・鑑賞できた。

各位の元気がまだ残っているようなので、オプションの「今井町」にも足を延ばした。が、既に日が陰ってきていたので、速足で南尊坊門跡から御堂筋沿いの商家を中心に巡り西門口跡近くの環濠復元や今西家(惣年寄りの筆頭を務めた家)と北尊坊門跡に戻って蘇武井を見学するに留まった。

赤い橋の蘇武橋を渡って近鉄八木西口駅で

今回のPWは解散、夫々帰途についた。

「桜井」の名称由来に始まり、香久山登頂によってKUWV-O B近畿支部による「大和三山登頂達成」、更に安倍文珠院-藤原宮大極殿跡-おふさ観音を繋ぐ「ボケ封じの長寿道完歩」も加わった盛り沢山のPWになったといえよう。



＜身体のボケ封じ寺、おふさ観音＞

実施に当たって、事務局を始め参加各位による絶大なご協力に篤くお礼申し上げたい。どうもありがとう！

中止となった 2017 サンマ PW

- ・実施予定日 2017 10/30(月)～31(水)
- ・場 所 ビラデスト今津
- ・参加予定者 (20名だった)

近畿支部発足の2004以来、秋の恒例行事のサンマPWが初めて中止となった。人的な理由による中止でない。超大型台風21号により、山上のビラデスト今津へ上る道路が崩れたというのだから仕方がない。

最初の10年間は「大久保雑草園」で、2014、2015は「いよやかの郷」、「ビラデスト今津」は、昨年に続くその2年目であった。これまでには11期の畔山・加藤で企画、それに主として15期が加わり運営してきた。今年の11期会がほぼ同じ時期で、また幹事が畔山・加藤となったのを知った三宅さんが「ならば、サンマPWは15期で担当しましようか」と言ってくれたのである。渡りに舟とはまさにこのことだ。会員への連絡およびHPの作成は、これまで通り加藤が行うことになったが、会場の予約、実施時期から始まり全てをお任せすることになった。

それだけに、企画担当の15期三宅さん、間所さんの諸準備の苦労が報われることがないまま終わったのが残念である。

当日の日程、購入品のリストアップ、レン

タルプロジェクトなど細部に亘って計画し、いつもの運営委員は当日の10時に近江今津に集合し買出しする予定だった。

ところが、心配事が報道された。それは、湖西線の電柱が台風によって折れたと言うものだった。JRの復旧というのは迅速だ。1週間もあれば復旧するだろうと思っていた。ところが、10/24(火)三宅さんからサンマPW実施不可の電話がかかって来た。

ビラデスト今津からは「道路も電気もストップ。この電話も他から掛けている状況ですので、しばらくの間施設は使えません」とのことだったよう。

台風21号の一週間後の日曜日、台風22号が同じようなコースを通り過ぎて行った。使用予定だった山上のBBQコーナーの防雨・防風シートは既に吹っ飛んでいたようで、それを聞けば先方の断りがなくとも中止に追い込まれていたかも知れない。

＜番外＞サンマ PW 仇討ち小浜花街 PW

中には、朝寝坊で近江今津は遠いという人がいる。近畿支部では金井家、加藤家が該当する。昨年は山上での前泊としたが、今年は小浜に前泊することにした。で、見つけたのが旧花街の最大定員が8名の一軒貸しの旧料亭。こんなのに乗るのがいつもの運営メンバーの森川さん、高村さん、間所夫妻。



＜小浜花街 PW のメンバー＞

台風22号の到来で、実施するか否か迷ったが、天気図を読み決行。日曜日午前中は激しい雨に見舞われたが、その後は小雨。翌日もまあまあの天気であった。昼は某有名店で海鮮丼を食し、晩飯は「チンご飯」と甘エビ、イカ刺しなど小浜を堪能した。サンマPWは中止となったが、明通寺など国宝も見られて仇討ちをした気持ち。満足できた。

(文責 11期 加藤 忠好)

東海支部報告

鳳来寺山 PW

17期 渡邊 和文

時：2017年4月1日（土）

メンバー：L. 竹本夫妻(21)、森川(11)、野村(12)、柴田夫妻(13)、佐野(15)、吉村夫妻(佐野氏友人)、川端(16)、小島(17)、渡邊(17)

行程：鳳来寺一ノ門駐車場に9時集合、出発→仁王門→傘杉→10:55 松高院(休憩)→10:15 鳳来寺本堂(休憩)→鳳来寺山奥の院→11:15 鳳来寺山山頂(684m)→12:00 鳳来寺田楽堂(昼食)→13:25 駐車場着。車で“鳳来ゆ一ゆ一ありいな”に移動、入浴。15時解散、帰路に就く。

東海支部設立5周年に相応しく総勢12名の参加。名鉄新安城駅、東岡崎駅で集合して車で移動。

鳳来寺一ノ門からの参道は芭蕉の句碑や若山牧水の像など見所多く、ゆっくりとしたペースで進む。1,425段の石段は濡れているので注意して登る。やがて鳳来寺に到着。本堂に参拝。ここは井伊直政が幼少期を過ごしたところ。「直虎ゆかりの地」ののぼり旗が並ぶ。11時15分山頂に着くもガスで眺望はなく、記念写真を撮って本堂まで戻る。田楽堂で昼食。



石段を慎重に下って、13時25分無事駐車場に戻る。近くの温泉施設に移動して、ゆっくり露天風呂を楽しんだ後、次回行事の「おんな城主直虎PW」の説明を聞き、15時解散。久しぶりに大勢のメンバーで和やかなPWとなりました。

小津権現山 PW

17期 小島 敬

時：2017年5月14日（日）

メンバー：L. 小島(17)、森川(11)、野村(12)、佐野(15)

行程：大垣駅8時集合。林道終点駐車場に9時前到着。駐車場(435m) 9:05→10:30 高尾山(956m) 10:40→12:05 小津権現山(1158m) 12:43→13:17 高尾山 13:25→14:23 駐車場。

あいにくの曇り空で、能郷白山をはじめとする奥美濃の山々の眺望は叶わなかったが、登山道はよく整備されていて、岐阜県民が愛してやまない小津権現（おづごんげん）山を堪能できた。



期待したイワウチワは完全に終わって数輪がわずかに咲いていたのみ。でも、シャクナゲやシロヤシオが見頃で、ブナやミズナラの新緑も我々を楽しませてくれた。



下山後、麓の小津集落の白山神社にお参りした後、「道の駅 星のふるさとふじはし」にある「ゆいび川温泉・藤橋の湯」で山の汗を流した。

おんな城主直虎 PW

17期 渡邊 和文

時：2017年6月10日（土）

メンバー：L. 小島(17)、森島(4)、野村(12)、柴田夫妻(13)、佐野(15)、吉田(17)、渡邊(17)

行程：東岡崎駅8時集合[車で移動]⇒9:30竜ヶ岩洞（りゅうがしどう）見学⇒10:20渭伊（いい）神社駐車場着、参拝、天白磐座（てんぱくいわくら）遺跡→妙雲寺→11:15伊伊谷宮（いいのやぐう）、龍潭寺（りょうたんじ）→井保（ともやす）公出生の井戸→12:40井伊谷城跡→紅屋[みそまん]→13:10昼食[鰻いしかわ]→14:30渭伊神社駐車場⇒14:45館山寺温泉♨サゴーロイヤルホテル[入浴]⇒17時東岡崎駅着、解散

佐野さんと小島さんの車に分乗して移動。竜ヶ岩洞は東海地区最大規模の鍾乳洞。気温18℃の涼しさを30分ほど楽しむ。車で大河ドラマの地「井伊谷」に向かう。渭井神社に参拝。背後にある古墳時代の祭祀場「天白磐座遺跡」の巨石に手を当てパワーチャージ。

次に直虎と南渓和尚の位牌が見つかった妙雲寺を訪ね、多くの人で賑わう井伊家の菩提寺の龍潭寺を拝観。小堀遠州作の庭を鑑賞。続いて井伊家初代の共保公が生まれたという井戸を見学。残る名所の一つ井伊谷城跡に向かう。標高114.9mの山頂に大汗をかいて直登。井伊谷の街並みや遠くの浜名湖、浜松市街を望む。下って、川端さんお薦めの”みそまん”を買う。途中、鰻の蒲焼の匂いに引き寄せられて鰻重を堪能。駐車場に戻る。

歴史、美味、温泉を楽しんだ贅沢なPWでした。



渭井神社にて

暑気払い

時：2017年8月19日（土）

メンバー：森島(4)、中野(8)、野村(12)、柴田夫妻(13)、川端(16)、小島(17)、竹本(21)、安井(22)、渡邊(17)

会場：名古屋駅太閤口近くの焼肉 蘭

濛々たる煙の中で韓国風焼肉を楽しみました。

白山開山1300年記念 PW～美濃禅定道の拠点

～長滝白山神社と天領・石徹白を訪ねる～

17期 小島 敬

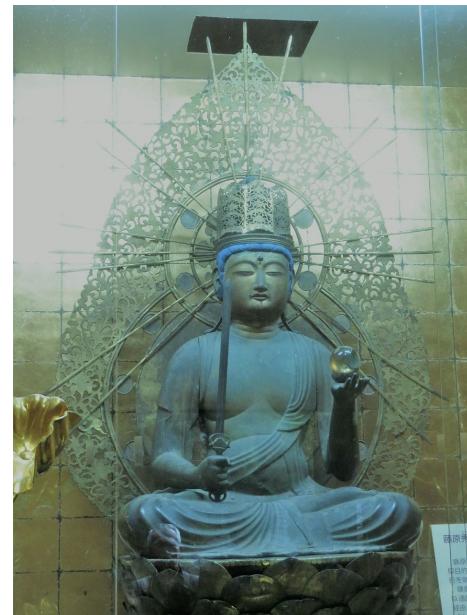
時：2017年10月21日（土）

メンバー：L. 小島(17)、森島(4)、森川(11)、野村(12)、柴田夫妻(13)、川端(16)、北川(16)、中野(16)、渡邊(17)、安井(22)

行程：（東海北陸道）→「道の駅白鳥」（昼食）→阿弥陀ヶ滝→石徹白・大師堂→（東海北陸道）北陸組（北川/中野）も含め、「道の駅 白鳥」に9時半集合。小雨の中、白山文化博物館、長滝白山神社〈東海地方の白山信仰の中心地〉を訪ねる



高水間さん（8）のご紹介により、石徹白（いとしろ）在住の郷土史家・上村様に大師堂をご案内いただき、国重文の虚空蔵菩薩像を拝観した。学識に裏付けられた上村様の優しく分かりやすい語り口に魅了された。



その後、白山中居神社〈美濃禅定道の中間地点〉を参拝し解散。熟年組にふさわしく、白山信仰の歴史への理解をじっくりと深めるPWとなった。

第20回 野沢温泉スキー合宿2017

11期 幹事 青柳 健二

・実施日 2017年2月17日～20日

・参加者 ④佐藤 ⑦村田 ⑧野村孝 ⑨伊藤、保田、山中、吉田 ⑪青柳、井上史・和、片田、上村 ⑫野村益、宮島 ⑬大島、辰野、柴田、山西久・潤 ⑮上馬、舟田 ⑯堤 ⑰松下 (23名)

今回は、本スキー合宿が1998年に開催してから第20回目の合宿であり、「第20回記念合宿」として大々的にアピールして参加者を募りました。結果、直前に0期 田村さんが体調不良により不参加となつたものの、歴代最多の23名が野沢に集い開催されました。初参加は、9期吉田洋次郎さん、13期大島良治さん、18期堤善朋さんの3名。一部の方は都合により18日夜の第20回記念式典には参加されませんでしたが、記念式典は18名の参加を得て盛況に行なうことができました。

急変する天気の中でも、皆さん体力に合わせて自在にスキーを楽しまれ、怪我もなく無事に終えることが出来ました。お忙しい中を参加され、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

【スキーのこと】

私は、17日（金）～20日（月）で参加し、4日間スキーをしました。まずその状況を報告しましょう。

2月17日（金） 八王子の山中さん同伴で、9時40分に飯山駅着。新幹線で来た村田さんを伴い10時過ぎに「ふるさと」に着くと、富山から車で来ていた井上史三・和子夫妻に迎えられました。その口から「長坂ゴンドラが強風の為動いていない」とのショッキングな発言。昨日から入っている山西さん夫妻は、日影ゴンドラで登って上で滑っているとの事。12時からの1.5日券で滑ることとして、新幹線で来た伊藤さん・Y野村さんと上田の宮島さんを加え、12時前に宿を出てゲレンデに向かった。

冷たい雨が降り出す。日影ゴンドラに乗り上の平まで登って、山西さん夫妻と再会する。やまび

こ方面に行くリフトが動いていないので、パラダイスゲレンデを滑ることとする。風はそう強くはなかったが雨が舞うなか、2回程すべりゲレンデ内のレストランで昼食とする。雨を含んだ斜面は重く、いつもなら快適にスピードに乗って滑れる斜面だが脚にくる。レストランを出ると雨が強くなってきた。

まあ、久しぶりのスキーで滑る感触を得たことを良しとして、チャレンジコースから下ることにする。リフトを乗り継ぎ、3時頃には宿に戻った。新調したウェアが雨でビックショリ濡れていた。宿に頼み込み、甘酒を出してもらって疲れを癒した。

2月18日（土） 昨日の雨は雪に変わり、車の上には新雪が10cm程積もっていた。

昨日のメンバーに上村さんを加えて長坂ゴンドラを登りやまびこエリアに出ると、そこは真っ白な霧に覆われていた。上のリフトが全く見えない。これでは上はダメと判断し湯の峰ゲレンデで滑ることにする。視界は20mから30m程で、ゲレンデの斜面でコースを探しながらの滑走。それでも、新雪をならしたコースは滑り易く、少しづつ調子が上がってきた。二人乗りリフトだが、久しぶりに一緒に滑る仲間とのリフト上の会話が楽しい。そのうちに、だんだん視界が晴ってきた。11時頃には、青空が見えるほどに回復。早めに昼食をとろうと中間駅からゴンゴラに乗り、上の平ロッジに向かった。

ロッジで昼食をとっている間に、佐藤さん・野村さん・上馬さん・松下さん・堤さん・片田さんなど仲間が集まってくる。



一年ぶりの回合で、この瞬間が嬉しい。予定より一日前に帰ることになった山西さんと別れ、12時半過ぎにロッジを出てやまびこゲレンデに向

かった。天気は、うす曇り視界は良好で絶好の条件となった。毛無山山頂まで登ってやまびこAコースを滑る。この日は、土曜日で多数のスキーヤー・ボーダーが滑っており、ゲレンデは柔らかいコブが連なり、私の得意な快適スピード滑降が難しい環境となっていた。転ばないように慎重に滑る。井上さん達とやまびこAコースを滑り急斜面上で一息入れて、ふと上を見ると、そこに赤いウェアと黒ヘルメットの保田さんが立っていた。こんな形で出会うのだから、ビックリである。

この日帰る井上夫妻を見送り、2時半丁度に今日来たグループとレストハウスやまびこで合流、一階の喫茶フロアで一休みして、それぞれが体調にあったコースで宿に戻った。私は、片田さんとスカイラインを滑って3時半頃に無事滑り終えることが出来た。宿の自家製甘酒を2杯飲んで、疲れを癒した。

2月19日（日） 朝起きると軽い雪が舞っていたが、朝食を済ます頃には止み、スキ一日和に。

この日は湯の峰ゲレンデで10時半からビデオ撮影会、保田さんがゲレンデの緩斜面でビデオを構えて、一人ずつビデオ撮影を行う。私も二回目からデジカメの連写機能で撮影に挑んだ。ただし、ピンボケ写真の連続となってしまった。滑る方と撮る方の技量がマッチしないとスキー滑降の撮影は難しいのである。このゲレンデには、休憩やトイレを使う食堂が無くなってしまったので、頃合いを見て撮影会は終わりにし、水無ゲレンデを滑って早めの昼食とする。もう少し写真を撮るというY野村さん、国展の準備がある村田さんと別れ、昨日と同じ上の平ロッジに入った。この時のメンバーはO野村さん・保田さん・伊藤さん・上村さん・堤さん・私の6名。少しづつメンバーが減っていくのが寂しい。

昼食をとって外に出ると快晴で一面青空が広がっていた。勇んでやまびこゲレンデに向かう。リフト上からは雪を薄く被ったブナの樹がキラキラと輝き素晴らしい景色が広がっていた。山頂に出て、周りの景色を眺めて振り返ると、そこに湯の峰ではぐれた佐藤さん・辰野さん・上馬さん・松下さんが立っていた。こんな偶然がまた楽しい。

「毛無山山頂 1650m」の標識を前に記念写真を撮る。やまびこAコースを滑り、リフト奥の喫茶室

で休憩する。この日もスキーヤーが多かったので、コースが荒れていて、滑りにくかった。その後は、それぞれが、この日の疲れ具合に合わせコースを選んで宿に戻った。こんな上天気なら、昔はもっと滑ったものだが、疲れが溜まってきたのでスカイラインを降りて3時過ぎには宿に着いた。



2月20日（月） この日は午後から天気が崩れる予報。1.5日券を買っていたので、滑ろうと準備する。

スキー靴を履こうとしていた9時過ぎに、O野村さんから電話が入った。「長坂ゴンドラが動いていない。」と言う。17日と同じ事態にガックリする。もう少し早く電話をくれたら、保田さん達9期のミニ同期会と一緒に街歩きに変更出来たのに。日影ゴンドラまでいくと、長蛇の列が繋がつており、上に登るのは諦めて、下で滑ることにする。一人雨が降る中、日影ゲレンデを3回すべり、今年のテーマである「自然で楽なスキー」の動作確認に務めた。カンダハコースのリフトが動いているのに気が付き、東・西のコースを各一回滑った。雨で重い急斜面で転倒せず滑れたことにホッとしたスキーを終える事にする。

カンダハコースを降りて少し先に「日本スキー博物館」がある。スキー靴を履いたまま館内を見学できる博物館です。そこの見応えあるスキーコレクションを見学し、日影リフト横のレストランで昼食をとり、1時頃には宿に戻った。宿には、既に先行した辰野さん・佐藤さん達も戻っており、O野村さんによると「日影ゴンドラを出ると凄い強風で、滑るより押し戻されるようだった。早々に下におり、風の弱い柄沢ゲレンデを何回か滑ってスキーを終えた・・・」とのことでした。

思えば、1998年の第1回スキー合宿の初日、先のりした森川さんと私は、雨が降る様にガッカリ

して、その日はスキーをせずに、確かスキー博物館を見学したと思う。そして、第20回の今回も、最後の日には雨となり、再びスキー博物館を見学したのでした。二度目のスキー博物館、コレクションは充実し、外人スキーヤーが沢山見学していました。時は巡り、時代は移っているのでしょうか、私の行いは余り変わっていないのか??

【夜の宴・第20回記念式典のこと】

2月17日（金）夜 前夜祭

参加11名 朝ぎり・夕ぎりの間

夕食の後、食堂で村田茶匠による茶会が開かれました。茶菓子は、宮島さん持参の小布施の栗羊羹。村田さんは、見事な手さばきで持参のお茶碗に濃茶を立てて下さり、美味しくいただきました。去年と同様に宿の方々にも立てて下さり、大変喜ばれました。

この日は、明日夜の記念式典に参加できない井上夫妻と山西夫妻の為に、第20回記念合宿の記念行事の概要を説明し、液晶テレビに記念写真集の一部を映写しました。井上さんの二人の娘さんが参加された第4回と、夫婦で参加された第5回の合宿の写真を眺め、史三氏の黒い頭髪の若々しい姿に、時の移ろいを感じいたのでした。二人の娘さんは、それぞれ結婚され、3男と男女の母になられています。本合宿20回の歴史の重みを感じさせる写真なのでした。



2月18日（土）夜 スキー合宿第20回記念式典 参加18名 食堂・大広間B

第20回記念合宿のメインイベントである記念式典を、夜6時から食堂で行いました。

まず、私が開会を宣言し、「スキー合宿 参加

者一覧(第1回～第20回)」「第20回記念行事 実行計画の概要」の2枚の資料を配布しました。

その資料により、この合宿が1998年(平成10年)に開始され今年で第20回となり、その間に延べ59名が参加(OB42名、家族・友人 17名)している事実を説明。そして、記念行事の目的、実行委員会の委員紹介、記念行事の概要(記念式典、記念ビデオ・記念写真集・記念文集の作成)を説明しました。さらに、この行事を実行するに当たり、OB会からお祝い金・支援金として10万円を提供して頂いたこと、その支援と共に歴代参加者から寄付金を納付して頂きたい旨を説明して、全員の拍手で賛同を得ました。

そして、本来なら最長老の田村さんが音頭をとる場面ですが、その代役に最年少で弟子である松下さんの音頭で乾杯をし、夕食となりました。

食事の間に、OB会久富会長から届いた「金壱拾萬圓也」の目録を紹介させて頂きました。さらに不参加となった田村さんからのメッセージを紹介、そこにはワンゲルの始祖鳥として後輩に伝えたい遺言と、トランプ氏が米国の大統領に就任したおり、倭国大統領候補としての日本の改革提言が書かれていたのでした。松下さんが、「管見(日本再生の為に)」をロウロウと読み上げ、やんやの喝采を浴びました。

食事を終えた夜7時過ぎから、スキー合宿の功労者の表彰式を実施しました。

まず、全20回、その間素晴らしい宿を提供していただいた「ふるさと」の西方清ご夫妻に感謝状を授与し、記念品として木目調掛け時計を贈呈しました。この時計は、翌朝には食堂に掛けていただき、喜んでもらいました。この日の夕食時には、宿からお祝いとして「自家製どぶろく1升」が提供されました。美味しい料理と、優しい心遣いがあつてのスキー合宿であり、今後も末永くお世話を願いしたいものです。

そして、最多参加者の表彰式は、19回参加の準皆勤として上村さんと青柳に表彰状を授与、記念品が贈呈されました。上村さんは、転倒して眼鏡を壊したことがあり、野沢の「湯澤神社スキー安全御札」が、私には、第3回からの「ビデオシン集DVD」が贈られました。また、今回不参加となった田村さんにも、参加18回で準皆勤として表彰状を授与、記念品には冬の健康の為に

「ヒートテック下着上下セット」を贈呈しました。これも松下さんに代理授与し、後日私が宅急便でお届けすることにしております。それぞれの受賞者には、記念の副賞として、保田さんが各人の名（迷）シーンをビデオから切り抜いて合成した写真を額に入れ贈呈して下さいました。有難うございました。



表彰式も無事終わり、場所を大広間に移して、8時前からお待ちかね夜の宴に入りました。

まず、佐藤さんが、1959年（昭和34年）のワングル山ノ坊スキー合宿の写真を披露して下さいました。

ゼッケンを付けた部員11名に指導員2名の記念写真と斜面で横すべりの練習をしているシーン。佐藤さんのスキーは、板のスキーに竹のストック。今から58年前の写真ですから、良く残っていました。スキー博物館が喜ぶ様な写真ですが、これがワングルスキーの原点でありましょう。

次に、保田さんが製作中の記念ビデオの予告編が映写されました。ビデオは3部構成で、第1部は各回の記録。第2部は、スキー合宿の魅力。第3部は、参加者の個人映像で出来ています。予告編として各部3項目程度が映写されました。第1部では、舟田さんが立ちあげたスキー合宿開始第1回の記録を「やまと」との記事と写真で紹介。それに先立つこと27年前の1971年に、11期 加藤さんが開いた野沢温泉OBスキー合宿が紹介されています。

私は、この時のスキー合宿にも参加しており、野沢温泉とワングルOB連中との集いの楽しさに魅了され、今に至っていることが確認できました。第三部の個人記録編では、田村さん、佐藤さん、村田さんの映像の後に、8期 柴田さんの映像

が流されました。柴田さんは、第3回に妙高でのスキー大会参加後に奥様と飛び入りで参加され、以後第9回まで4回参加して下さいました。全日本マスターズスキー大会に県代表として参加される実力者で、最速のスキーヤーと言えましょう。私は、志賀高原でもご一緒させてもらいましたが、スキーにかける情熱は大変なものでした。惜しくも2007年2月18日に病気で亡くなられました。くしくも記念式典の当日が、10年目の命日なでした。

同じ年の10月には、11期 守内さんが亡くなっています。お二人のご冥福を心よりお祈りいたします。

この予告編、見応えがありますね。やはり動画の記録性・その時代と人を蘇らせる再現性は素晴らしい。ビデオの撮影は、第3回から加藤さんと第4回からは保田さんも加わり、殆どの回で行われており、20回分を整理・編集することで、野沢温泉スキー合宿全20回が記録されることになります。完成が期待されます。

失われた命があれば、産まれる命もあります。実は片田さんの子女道子さんがスキー合宿直前に元気な赤ちゃんを出産されました。双子の男女とのこと。片田さんは、爺バカ振りを発揮しながら出産直後の母子の写真を見せてくれました。道子さんは、第4回から4回スキー合宿に参加されています。その時はピアノを学ぶ学生で、第8回の合宿では、宿のピアノでコンサートを開いてくれたのでした。このスキー合宿の歴史に、また新たな花が咲いた感があります。

その後、私が記念写真集として編集した写真の一部を映写しました。これは、記念ビデオ作成の原データでもあります。皆さんが撮ってくれた写真を年ごとに纏めて整理しました。全20回の写真アルバムとなります。

この時は、記念ビデオ（予告編）で紹介しなかった中期・後期の写真を映写。快晴の時の絶景写真や野沢のブナ林を撮って国展写真部門に初入選した村田さんの写真などを披露しました。

その続きで、私が現役時代の夏合宿や春山合宿・追出しコンパなどの写真を映写しました。

保田さんがリーダーであった夏合宿、一年生は加藤・今村（井上）・上村・私の4名。この4名は、このスキー合宿仲間となります。1年の夏合

宿は、その後の運命を左右する出会いの場だったのです、それから50年が経つのですが、未だにかのような親しいお付き合いを続けることになるのですから、嬉しいことです。でも、この時の皆の姿の若々しいこと・・・

ビデオや写真を見ながらワイワイガヤガヤやっていると、いつの間にか9時半を超えていました。皆さんお疲れの様子。田村御大が居れば、北の都など歌が出るとこですが、明日の予定などを告げて、静かにお開きといたしました。

2月20日（日）夜 後夜祭

朝ぎり・夕ぎりの間

この日は、最後に残った、9期ミニ同期会組と金沢の辰野カ一組と私の8名での宴。

この日、初めて野沢温泉に来て、スキーをせずに温泉とお酒とワングル仲間との語らいを楽しみに来た吉田さんのために、まずこの日に撮った絶景のゲレンデ風景を液晶テレビで映写しました。また昨日の「祝野沢温泉スキー合宿第20回」記念写真なども見てもらいながら、いつもながらのワイガヤ歓談。早朝の中尾の湯に行き、素早く裸になって、モウモウと湯煙が湧く湯舟に入ってみれば、そこには数10cm程の熱い湯しかなく、慌てて飛び出した・・・との佐藤さんの失敗談。この時は、湯舟を掃除した後のお湯張り中だったんですね。こんなとりとめもない話に盛り上がり、時は過ぎていきました。

第20回のスキー合宿は、雨に始まり、また雨

にて終わる急変する天気の中で、無事に終了することが出来ました。

ただ、私もしみじみ感じていることではあります、開催20年数えで20周年とは、私達も確実に歳を重ねている・・・ということです。初回には、僅か一人であったシニア（60歳超）は、今や最年少者を含め全員がシニアとなっています。私も、今年で古希を迎えるが、雨による重い雪や、新雪が積もった後で荒れた柔らかいコブ斜面などでは、力と勢いだけでは滑りきることが出来なくなりました。日ごろのトレーニング不足もありますが、すぐに疲れ足腰が張ってきます。

私は、あと10年はスキーをしたいと思い、未だ現役の先輩方を見て、そのつもりでいるのですが、体のケアとともに滑り方にも工夫が必要ではと思っています。今回は、古書店で偶然入手したスキー教本「自然で楽なスキーの勧め」に基づき重力を利用した自然で楽なスキーをマスターすべく試みたのですが、うまく成果は上がりませんでした。いろいろと思考錯誤をしながら、加齢に勝てるスキーを実行していきたいものです。

数年前なら、午後11時頃まで続いた夜の宴も、今回は3回とも10時前にはお開きになり、素直に床につきました。夕食前に、持ち寄ったお酒やワインで早く出来上がってしまうこともあります。

皆さんも、自分なりに体のケアとスキーの滑り方を工夫することにより、未永くスキーを、スキー合宿を続けていきましょう。



ワンゲル7期生大集合

7期 澤田 孝雄

我々ワンゲル7同期生は、5期、6期の先輩や、8期のメンバーと共に、毎年8月14日にゴルフと飲み会を金沢で30年以上にわたり開催しています。今年も11名のメンバーが集まり、金沢駅の3階の飲み屋で五十余年前の夏合宿やPWの話に花を咲かせました。何年経っても話題の中心は現役時代の話です。ゴルフの方は後期高齢者世代になり、プレーをする人が減ってしまい1組4名になってしまいました。また、昨年辺りから皆の話に変化が生じ、自分の健康についての話をする人が増えてきました。ガンと診断され手術を受けたとの話も増えました。一方で就職先での仕事が評価され叙勲を受ける同期生もありうれしい限りです。今後も集まれる同期がおる限り、続けていこうと意見が一致しているので、来年も8月14日に開催いたします。



(金沢駅3階八兆屋 道の蔵 2017.8.14)

後列左は 7期 新谷正喜 7期 干場良平 7期 澤田孝雄 7期 田丸稔 7期 四十万利之 7期 福田繁機

前列左は 7期 小野江佳美 8期 山村嘉一 5期 稲葉正巳 7期 宮本則夫 5期 影近憲一
以上11名

27年ぶりに静岡にてワンゲル15期会

15期 増田 富雄

平成29年10月8日(日)と9日(月)の連休2日にかけて増田の生まれ故郷かつ今居住している

静岡に15期のメンバー・奥様21名が集まり、静岡の歴史・文化・食材を楽しみ本当に楽しい思い出深い同期会となりました。それも参加いただいた皆様のご協力とワンゲル時代に築いた団結力の結果ではないかと自負しております。

それでは概要を説明いたします。

1. 日時 : 平成29年10月8日・9日
2. 宿泊場所 : 静岡市鷹匠町のもくせい会館
3. 歴史散策 : 駿府城公園・臨済寺・静岡浅間神社・登呂遺跡他静岡市内
4. 参加メンバー : 上馬康夫・敏栄夫妻, 宇野潔・篤子夫妻, 奥名正啓, 金井澄, 坂尻忠秀・知恵夫妻, 鈴木良紀, 祖父江直久, 佐野哲雄, 舟田節子, 増田富雄(幹事)・敦子夫妻, 松下重人, 松縄宏, 松林知一, 間所新一・美智代夫妻, 三宅毅, 高村千佳子・・・以上21名(南保昭雄は仕事の関係で不参加)
5. 今回のテーマ :『第2のスタートの15期会』
昭和60年に今回幹事の増田が呼び掛けてスタートした同期会が32年目に入りサラリーマンはほとんど定年退職となったことより敢えてあと32年続くようにという願いを込めて第2のスタートとしたもの。また増田が生まれ育った静岡をゆっくり味わって欲しいと思いワンゲルらしく歩いて回ることとしました。(1日約8km、2日間合計で15km)

行動記録

10月8日(日)

21名(幹事除きで19名)もいると静岡周辺前泊組あり、ローカル電車で来静する者、安い新幹線こだまで来る者、普通に新幹線ひかりで来る者が静岡の饅を食べたいと言うので幹事が老舗の饅屋を予約した人数が何と13名と半分以上が集合前に饅を食べることとなった。先ずは静岡の食材食べ歩きのスタートを切る。

13:00 集合時刻に集まったのは20名、1名不明。車での来静組は12時頃には到着し、饅組は13時5分前に到着、あと1人の奥名が行方不明の状態。携帯電話に電話かけるも”携帯電話に繋がりません”というメッセージ!何人かで電話をかけていると繋がったため「今ど

こにいるか？」と聞いたところ「俺は今どこにいるのか？」との回答、「町名は分かるか？」との質問に「長沼3丁目の看板がある」との回答、「長沼ならば西に向かって歩き電車かタクシーに乗り来るように」と言うと「どっちが西かわからない」と言うので「太陽を向いて右の方向が西だ」と増田が言うと「太陽は真上だ」と言い仕方なく「近くに何があるか？」と聞くと「交番があるが中に警官がいない」と言う…！こんな問答を繰り返すうちに電車の線路があるというので太陽を背にしその線路に沿った道を左に少し進めば静岡鉄道の長沼駅にぶつかると指示を与えるやく遅ればせながら奥名が合流することとなった。この珍問答事件により予定が最初から狂うスタートとなった。

14:00 全国的にも珍しい天守台発掘調査体験。
兜と軍手を身に着け鋤簾（じよれん）と籠を手に持ち、いざ天守台へ！駿府城天守台は68m×60mで江戸城天守台は45m×41mと言われかなり駿府城天守台の大きいことがわかる。お宝を発見できるか？21名が並んで鋤簾を使い掘り進め坂尻他3～4人が江戸時代の瓦破片を発見。残念ながら大判・小判は発見できず。



駿府城天守台発掘調査隊

14:30 瓦等の刻印を拓本に作り1時間の発掘調査体験は終了。

15:00～16:45 駿府城内紅葉山庭園で抹茶タイム（徳川家康が好んだ本山茶）と東御門・翼櫓を見学の後、静岡県庁21階に上り駿府城公園・静岡市内を眼下に富士山・南アルプス・

駿河湾を一望した。富士山はほぼ見えたものの南アルプス残念ながら見えず。

17:00 もぐせい会館に帰り風呂で汗を流した後、大宴会。静岡の食材を使った料理（静岡おでん・サクラエビのかき揚げ・アーマラトマト他）とみんなの笑顔で乾杯。増田が用意したDVD（昭和61年第2回目15期会の8ミリフィルム・昭和63年第4回目15期会のVHSビデオ・平成元年第5回目15期会のVHSビデオの3本を編集まとめたもの）を約50分間上映。30年前の懐かしい映像にみんなが見入っていたこのDVDを今回のお土産とさせてもらった。その後は例のごとく幹事部屋で語らい歌い15期の絆を確認した。



後列 宇野 増田 佐野 金井 奥名 鈴木 松下
中列 三宅 祖父江 間所 坂尻 松林 上馬 松繩
前列 高村 上馬 坂尻 宇野 間所 増田 舟田

10月9(月)

7:20 朝食バイキング（しらすおろし・わさび漬け他静岡の食材）

8:30 今川義元が軍師太原雪斎に兄氏輝の菩提寺として建立させた臨済寺まで歩く。途中、増田の母校静岡高校や坂尻の奥さんの母校静岡大学跡地（今は城北公園）を通り臨済寺へ！氏輝・太原雪斎・中村一氏の墓は階段を上り40～50メートルのところに並んで立っており結構きつく息も弾む。

9:30 徳川家康が元服式を行ったという以上に丁度半年前の4月に天皇陛下御夫妻とスペイン国王夫妻が来静した折、稚児舞をご覧になられた静岡浅間神社まで歩く。



臨済寺にて

10:15 もくせい会館まで歩き今度は車とタクシーで子供の頃社会科で勉強した弥生時代の登呂遺跡へ！

10:40 登呂遺跡に到着し、半分は火起こし体験、半分は赤米土器炊飯に分けて体験する予定が登呂遺跡側の段取り悪く、火起こし体験のみとなってしまったことと火起こし体験を全員ができる様に予約してあったのにできなかつたこと等なかなか打合せ通りにはいかないことを痛感した。火起こし体験や竪穴式住居見学は童心に帰らせてもらえたことと思う。登呂博物館屋上から晴れていれば富士山や南アルプス・伊豆半島が360度スコープで見えるのだが曇天の為叶わず。

12:30 再びもくせい会館に戻り昼食（自然薯を使ったとろろ汁・食後には安倍川餅といったまたまた静岡の食材）。食後、松林君は東海道ウォーク四日市宿に向か、祖父江君は家庭の事情で早目に帰る。

14:30 静岡駅までとの全員を送り解散する。

ワンゲル15期会イン静岡はお陰で2日間とも晴天に恵まれ暑いくらいの夏日となりました。今年の秋は天候が不安定の中、最高の2日間を与えていただき晴れ男・晴れ女たちに感謝です。

歩いて我が故郷静岡を回って歴史と文化の香りおよび地元の食材を堪能してもらうのがテーマだったため毎日1万歩以上歩かせてしましました。かなり疲れてもう歩きたくないと思った方もいたと思いますが、勘弁願います。

僕達15期生は残念ながらこれまで何人の仲間を失ってきました。最初はワンゲルに入部した

ての昭和45年新トレで桂茂樹君、昭和58年には高村栄一君を失った時に「毎年15期会を開催し、恒例行事としよう！」と昭和60年から毎年開催しております。

その間、平成2年に比田井忠篤君、平成7年に横井昭次君、平成18年に17期の宇野和子さん、平成23年には渡辺純久君を病気や事故で失いました。

そんな中で高村栄一君の奥さん千佳子さんが15期会のメンバーとなり毎回参加してもらえるのはありがたいことだと思っています。今回、比田井忠篤君の奥さん澄恵さんと横井昭次君の奥さん裕子さんに15期会への参加を呼びかけましたところスケジュール等の都合で参加できませんでしたが、今後も15期会のメンバーとして声かけしていって欲しいと思います。

昭和60年の第1回目の参加者は15期メンバーと奥さんの参加で始まり、次からは奥さんに加え子供達も参加するようになり、平成2~3年頃にはメンバー・奥さん・子供達総勢50名以上の大所帯となったことが懐かしい思い出です。子供達が段々と成長してくると今度は人数が減少し今的人数に落ち着きました。そんな懐かしい映像を今回DVDにして渡すことができたのは幹事として時間はかなりかかりましたがやってよかったですと満足しております。

次の幹事は上馬・松林両君に決まり、その次も祖父江君で決まりました。今回が昭和60年から数えて33回目となることより当面35回目まで決定しております。

（途中で年2回開催もありましたので回数は不明確ですが…！）

かけがえのない15期の仲間との出会いに感謝すると同時にいつまでもこの会が續いていくように願って筆を下ろします。

次回を楽しみに！また会いましょう！

24期 坪井陽典君を偲ぶ会

24期 酒井 智治

昨年10月、私たち同期の坪井陽典君が急逝されました。あまりにも突然のことで、皆で葬送す

ることも叶わず、漸く4月になって金沢にたくさんのKUWVの仲間が集まり彼を弔うことができました。

4月22日、場所は金沢駅から程近い料亭『喜乃屋』。私達24期の同窓のみならず、先輩後輩諸氏幅広く22期から26期まで、27名の皆さんに集まっていたいただきました。



在りし日の坪井陽典君 2009年 犬山にて

坪井君は、ワングル現役時代には熱心に山に取り組む一方、論客としてP審副議長の立場から、あるいは雑用に至るまで、部の運営に活躍してくれました。(天気図とエスケープルートにはうるさかったなあ。雑用は「めんどくせえめんどくせえ」と言いながら結構楽しんでいたような?)卒業後は、法曹界を志し司法試験に挑戦、苦節20余年、初志貫徹し名古屋に法律事務所を構えるに至りました。苦労の時代も成功してからもずっと最期まで、母ひとり子ひとりの生活において猛烈に努力し、責務に邁進しながらも我々仲間に時間を割き、明るく情厚く接してくれました。数年前には自ら東海地区のOB会を旗揚げするなど、恩

と絆を忘れぬ世話役でもありました。

偲ぶ会当日、18時集合。

お互いに何十年振りかという、ちょっと恥ずかしいくらいの雰囲気で皆が集まり始めました。

全員が揃い、坪井君に黙祷と献杯を捧げました。その後酒を酌み交わしつつ、ひとりずつ参加者全員が坪井君との思い出話を披露しました。



偲ぶ会 喜乃屋にて

思い出話で語られるのは、彼の圧倒的とも言える気配り気遣いの数々。

「いつも近親者のように話を聞いてくれた」「仕事のトラブル・家族の災難・旅行先でのアクシデントなど、解決に至るまで世話してもらった」「どこで聞きつけたか突然電話が来て、健康、子供のことまで気遣いしてくれた」
・・・などなど。彼らしいな、と思いつつ可笑しかったり、ちょっとしんみりしたり。。。)

23期の皆さんには、坪井が発起人で11月に金沢で集まることになっていたそうです。もっと早く集まれれば、と悔やんでいました。

こんなことを、坪井自身は『恥ずかしいからやめてくれよ』なんて思いながら聞いていたんだろうと思います。

集まったさんは金大卒業後30年以上、社会人としてそろそろ一段落を迎える世代です。仕事と家庭で余裕の無い時代を過ぎ、そろそろ仲間が恋しくなる頃、奇しくもこんなことで一同に会えたのも坪井のお陰。生前から彼も願っていたことなのでしょう。

酒と思い出に浸って坪井に感謝しつつ、そして
旧交を温めつつ、また皆で金沢で再会しよう、と、
それぞれが声を掛け合いながら散会しました。



偲ぶ会 二次会 かじ亭にて

・ ・ ・ ・ ・ 坪井陽典君に合掌。・ ・ ・ ・ ・

当日各地からお集まりいただいた先輩、後輩、
同期諸氏、ありがとうございました。

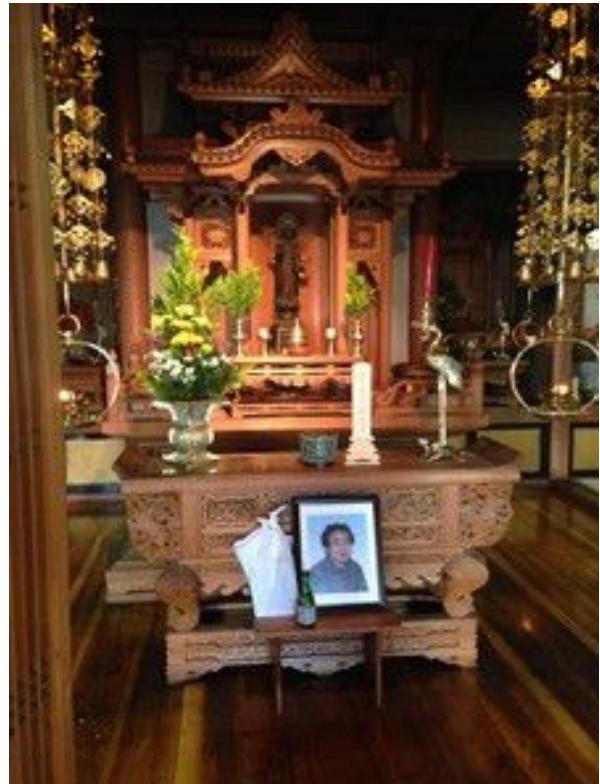
また、特に23期の中川様はじめ先輩の皆さん
には、計報に接してから何かとお世話になりました。
感謝申し上げます。

追記

24期 磯見 晃

11月3日、坪井君の一周年忌に善福寺へお参りに行つてまいりました。

坪井君の法律事務所で事を執っていた堀江様と奥様、東海支部の大先輩の皆様も
ご同行いただき、24期と26期のメンバーを合わせて総勢15名でのお参りとなりました。ご住職
にお経をあげていただき、ご焼香させていただきました。



善福寺の御仏壇

お参りの後、お寺の近くにある坪井君の旧宅に立ち寄り、学生の頃に泊めてもらったりして、お母様にお世話になった時の話などをしながらお寺を後にしました。



坪井君の旧宅

来年3月には、ご両親の眠るお墓に納骨の予定と伺いました。次は、お墓へお参りしたいと思います。

主将あいさつ

61期 山本 球

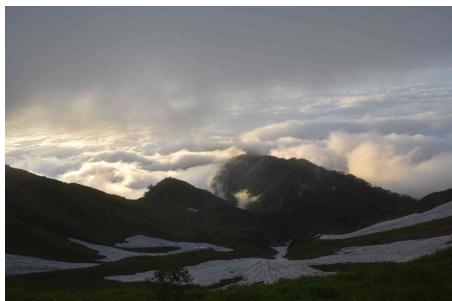
こんにちは、今期部長の役職に就かせていただきましたことになりました、61期の2年山本球と申します。今期1年、金大ワンゲルの長として、非常に責任重大で自分に務まるものなのか不安ではあります、精一杯頑張ります。

今期も多くの中入部員が入部してくれ、嬉しい限りです。少々多すぎるくらいで全員と親交を深められないほどですが、みな個性的で毎週部活に参加するのが楽しみなほどです。

さて、今期の10月に3年生の先輩方から役職を引継ぎ、部活の最高学年となった我々2年生はだいぶ人数が多く、僕よりも優秀な人材揃いです。そこで、現在、決して技術も体力も高いとはいえないワンゲルの状況を少しでも打破すべく、部活に還元可能で部員の技術向上に役立つ知識や技術をつけるために講習会参加や免許取得を推奨し、費用を部活から補助するという方針が決定しました。また、現在協議中あるいは試験段階であり、実現や実用が可能かどうかはまだ確定ではありませんが、部活で行う登山の安全性を向上させるための対策と、もし事故が起きた時に対応可能なように遭難事故対応マニュアルの作成に取り組んでいます。僕は高校でも山岳部に所属していましたため、わずかながらも一日の長があることを活かし、同期や、先輩方、時には後輩の力も借りながら、いつまでも金大ワンゲル部員が山や自然の美しさ、雄大さ、時には恐ろしさを味わいながらも、いつまでも楽しく活動できるように、できる限り努力をしていきたいと思っています。

2017年度夏合宿報告

今年度は8月に全4パーティーがそれぞれ、北アルプス、後立山、南アルプス、北海道へ行きました。



夏合宿 北アルプス

62期 宿南 勇斗

行程

- 1日目 金沢～太郎平小屋
- 2日目 太郎平小屋～北ノ俣岳～黒部五郎岳～黒部乗越キャンプ場
- 3日目 黒部乗越キャンプ場～鳶羽岳～三俣山荘
- 4日目 三俣山荘～三俣蓮華岳～双六岳～双六小屋
- 5日目 沈殿
- 6日目 双六小屋～槍ヶ岳～槍ヶ岳山荘
- 7日目 槍ヶ岳山荘～新穂高温泉～富山～金沢

8月14日から8月20日の間に夏合宿で北アルプスに行ってきました。僕はこのワンダーフォーゲル部に入るまで登山をしたことがなかったので、合宿というものがどんなものなのか想像もできず、楽しみな気持ちもありましたが不安も大きかったです。でも、夏合宿を終えてみるととても充実した1週間を過ごせたと思いました。

個人的に2日目の行程が一番きつかったです。合宿の前半なので疲れがたまっていたわけじゃなく予備食を含め食料を多く持っていたので、後半荷物が減る分前半の行程も長いこの日が一番大変でした。トレーニング山行で荷物の中に歩荷を入れて合宿に備えたつもりでしたが合宿の時が一番重く感じたし、また、それでもパーティーの他のメンバーの人達のほうが僕よりも荷物をもっていたので弱音は吐けないなと思いました。

合宿中は天気の良い日が少なく、景色を見ながら登ることがあまりできませんでしたが、その分晴れた日には景色を存分に楽しめたので、登山においての天気の重要性や有難みを実感できました。特に晴れの日の夜に見た星空は今まで見たことがないほど綺麗で忘れられません。

最終日は山を降りるだけでしたが、少しの間先頭を歩かせてもらう時があり、先頭の人は通る道や歩くペースなどいろんなことを考えて歩かないといけないと教えてもらえたし、今まで後ろで歩いているときは何も考えずに歩いていたんだなと実感しました。また、下山したあとに入った温泉はとても気持ちがよかったです。

夏合宿の1週間は終わってみるとあつという間だった気がします。貴重な体験ができた夏合宿でしたが当初の予定ではメンバーは10人で行く予定でしたが最終的には7人で行くことになったので、全員で行けたらもっと良い合宿になったと思うと少し残念に思いました。登山初心者の僕が夏合宿を無事に終えることが出来たのはパーティーメンバーの方々に引っ張っていただいたからです。また、楽しく登山できたのもパーティーメンバーの方々に恵まれていたからです。今年自分がしてもらったことを来年はほかの人に対してできるように山に関しての知識や技術を高めていきたいと思いました。



8月17日 双六岳山頂



8月19日 槍ヶ岳山荘と槍ヶ岳の頂上

いった山々を縦走するコースでした。キレットなどがあり、非常にバリエーションがあるコースであると感じ、出発する前から非常にワクワクしている反面、最後まで自分は踏破することができるのかという不安もありました。

1日目

自分は初めての夏合宿ということもあり、前夜ほとんど眠ることができずに当日を迎えることとなりました。そのため、新幹線に乗るとすぐに猛烈な睡魔が襲ってくることになり、そのまま長野駅までは全く記憶がありません。さらに、白馬までのバスでもずっと眠ってしまいあつという間に登山口についてしまった感じになってしまいました。

玄関口の白馬五竜スキー場から途中の地蔵の頭というところまでは単純なリフトとゴンドラの乗り継ぎであり、美しい山々の景色を堪能することができました。リフトでは通常の高さの半分の高さでの運転となっており、まさしく地面すれすれといった状態でした。その分高原植物とも近くで接することができ、改めて自然の豊かさというものを実感することができました。しかし、この時すでに何となく天気がおかしく、それがこの旅最大の決断に影響を与えるとはこの時まだ誰も知る由がありませんでした。リフトを降りるといよいよそこからが本格的な登山道となっていました。この日の目的地である五竜山荘のテント場が埋まってしまう恐れがあつたため、僕たちのパーティーは先発隊と後発隊に分かれることになりました。自分は先発隊としていくことになり先に出発しました。が、まだあまり荷物の重さなどに慣れていないこともあり。自分も含めすぐにはててしまいました。そのため結局、後発隊にも追いつかれてしまい全員でまとまっていくことになりました。はじめのうちは太陽が出ており非常に暑く大変でしたが、だんだんと登っていくうちに、雲がかかり、途中からは少々肌寒いくらいになりました。そうして何度も苦労をしつつ何とかこの日の目的地である、五竜山荘に到着しました。このころにはもうほとんどガスでおおわれており、五竜岳のみならず、数十メートル先も見えないといった状況でした。テント場も予想通り非常に混雑しており、苦労して何とかスペー

夏合宿 後立山

62期 小池 慶哉

大学生となった自分にとって初めての夏合宿ということもあり、高校時代よりもレベルの高い山行をしたいと考えていた自分は今回のこのコースを選択しました。当初の目標としていたコースは具体的には五竜岳～唐松岳～白馬岳と

スを確保しました。テントを張り終えるといよいよお楽しみの夕食の時間です。この日は野菜と鶏肉さらにはレモンの入った鍋でどのようなものになるか非常に期待をしていました。しかし、どこかでミスをしてしまい出来上がった料理は、レモンが強すぎて非常に酸っぱくなってしまって食べるのがやっとの代物になってしまいました。しかし残してしまったらだめなので何とか無理して全員完食をしました。そんなブルーな気分になりながら、明日こそ晴れてほしいと願いつつ1日目は終了しました。

2日目

二日目の朝、僕たちの期待は見事に裏切られる形となりました。朝起きると一面真っ白の状態が続いており、景色が何も見えませんでした。そんな鬱屈とした気持ちのまま朝食を食べ、もしかしたら頂上は晴れているかもしれないという期待を抱きつつよいよ五竜岳に登ることとなりました。しかし、進んでも進んでも一向に景色が晴れることはなくそのまま頂上に到着てしまいました。

晴れた日では雄大な北アルプスを一望できるはずが結局何も見えずじまいでの終わってしまいました。

山荘に戻ると、荷物をまとめ、先へ進むことになりました。この日は唐松頂上山荘までという今回の行程の中ではかなり楽なものでした。唐松頂上山荘のテント場も混雑すると困るのでこの日も先発、後発に分かれていくことになりました。自分は昨日の経験があったため、今回は後発で行くこととなりました。そうして先発が速いペースで出発すると、その何分か後に発しました。今回は太陽も出ておらず、比較的にゆっくりなペースであったため、あまりばてることもなく歩くことができました。それでも最後の山荘までの登りは岩場も多く、道も非常に狭いところが多かったため、慎重に進む必要がありました。そうしておよそ二時間ちょっとで目的地にたどり着き、先発隊との合流を果たしました。しかしここでさらに悪いニュースが飛び込んできました。なんと今回の行程で最も気を付けなければならないキレットを進む明日から2日間ほど非常に天気が悪く、雨も予想されていたのでした。さすがに2日間もこ

こで沈殿してしまうと日程的にも非常に厳しくなってしまい、かといって雨の中キレットを進むのは非常に危険なことであったため、僕たちのパーティーは非常に悩みました。その結果、僕たちは下山することを決定しました。一番のメインである白馬岳に登ることなく、非常に残念でしたが、やはり一番大事なことは安全に帰ってくるということだと実感しました。そうはいっても思い、唐松岳の山頂に登り、いよいよ帰ることになりました。その時、一瞬だけ雲が晴れ、雄大な景色を一望することができました。また、帰りも巨大な雪渓や有名な八方池なども見ることができ、これだけでも山に登ったかいはあったと感じました。そうして再びリフトやゴンドラを乗り継ぎ、全員無事に下山することができました。幸いなことに電車もまだ何本もありこの日のうちに金沢に帰ることができるということも判明しました。

自分たちはその後、ふもとの温泉に入り、駅まで行こうとしていたところ、追い打ちをかけるように雨が降り出していました。正直これが一番つらかったかもしれません。なんとか駅に着き、そのまま電車を乗り継いで無事に金沢に帰つくることができました。こうして、僕たちの短い夏合宿が終わってしまいました。

今回の山行では、残念なこと多かったです。やはり全員安全に帰つくることが最重要であり、仕方がないことも多かったため、次の機会を期待したいなと思いました。しかし、その中でも素晴らしい景色などをたくさん見ることができ、それだけでも今回の山行の価値があったのではないかと感じました。もし次行く機会があったなら、ぜひとも絶景をこの目に焼き付けておきたいなあと感じました。



夏合宿 南アルプス

61期 松島 英志

<1日目>金沢～広河原

我々の夏合宿はもともと遅れてしまった発注と台風による配達の遅延により合宿中にパーティーTシャツに腕を通すことがないことが決定することから始まりました。金沢駅にて恒例のお見送りをしていただき、割れた酒瓶とアルコール臭、差し入れのお酒を落としてしまい傷心の後立山Pリーダーに後ろ髪を引かれる思いを押し込め新幹線かがやきに乗り込みました。新幹線にて地図やヘッドランプの入ったリーダーのポーチがないことが発覚するという事件を起こしながらも長野駅に到着。長野駅で普通電車に乗り換え日本三大車窓である姨捨駅の絶景などを眺めつつ灼熱の甲府駅に降り立ちました。その後ジャンボタクシーに乗り予定通り広河原に到着しました。そして明日からの天気に一抹の不安を抱えながらも無事と言えるか曖昧な初日が終わりました。

<2日目>広河原～北岳～北岳山荘

初っ端から1600mアップというハードな2日目が始まりました。北岳山頂に向かう途中は不安だった天気は晴れており強い日差しの中を進んでいきました。長い樹林帯にうんざりもしましたがそこを越えれば鳳凰三山などを眺めることができ順調なスタートを切れたように思いました。ですが、肩の小屋に向かうあたりから雲が迫りはじめ、肩の小屋からは完全に雲の中に入ってしまいました。これ以降しばらく雲が晴れることはありませんでした。せっかくの山頂でも景色を拝むことはできずこの日は北岳山荘まで下り傾いたテントの中で就寝することになりました。

<3日目>北岳山荘～農鳥岳～農鳥小屋

この日も引き続き雲の中での行動となりました。一度農鳥小屋でテントを張りサブザックで農鳥岳へと向かいました。時々現れる雲の切れ目に一喜一憂しつつも結局晴れることではなく、ここまで山行でたびたび休憩をともにした北海道のおじいさんに山頂で別れを告げました。その後、まさにこの原稿を書いている数日前にそのおじいさんからブドウが届きました。閑話休題、お昼

ごろには小屋に戻り、明日こそは晴れることを願いのんびりと過ごしました。私は山で過ごすこの時間が結構好きです。

<4日目>農鳥小屋～間ノ岳～長衛小屋

朝起きてテントから顔を出したとき、煩わしかった雲は眼下にありました。高揚を胸に朝食を済ませ間ノ岳へと向かいました。昨日歩いてきた道はこんなだったのか、北岳はそこにあったのかなんてことを考えながら昨日とは一変した景色を楽しみました。個人的に念願だった富士山を遠目に拝むこともでき大満足でした。ですが、間ノ岳山頂を過ぎ、小屋に向かう道中でメンバーの1人が浮石に足を取られ捻挫してしまったことなどにより日程に遅れが生じました。ちょうど山の日の3連休だったこともありテントの混雑を想定し、班を二分し体力のあるものを先行させました。先行メンバーの頑張りで何とかテントを確保することができましたが、メンバーのけがの具合がよくないことから行程を1日減らし次の日に帰ることになりました。そのため最後の晚餐をみんなでわいわい楽しみました。

<5日目>長衛小屋～甲斐駒ヶ岳～甲府～金沢

最終日はサブザックを持ち、テントにメインザックとケガしたメンバーを残し甲斐駒ヶ岳の山頂へ向かいました。多少雲はありますが基本的には晴れの中登山の行程は終えることができました。その後おのの荷造りを済ませバスやジャンボタクシーを乗り継ぎ、途中で温泉にも入り甲府駅へと向かいました。甲府駅では勧められていたほうとうを食べ、お土産も買いました。その後メンバー9人は金沢へ、私は旅行をするために甲府に留まりましたが宿が取れなかつたため八王子へ向かいました。一人甲府駅で焦っていた時間が一番つらかったです。

いろいろなトラブルがありましたがそれもひっくるめて夏合宿は楽しいものなのです。来年は最後の夏合宿になります。どんな景色やトラブルが待っているのかとても楽しみです。



4日目 間ノ岳山頂にて



夏合宿 北海道

61期 井上 翔介

今回、僕たちは北海道の旭岳（大雪山系）～忠別岳～トムラウシ山～化雲岳といったルートを縦走しました。山に4泊5日、移動や観光の日を含めると9泊10日という長期日程で行われた今回の夏合宿、非常に濃密なものでした。その内容をここに書き記します。

<一、二日目>移動

出発したのは8月19日の夜、その日に電車で敦賀まで移動し、そこから苫小牧行きのフェリーに乗って北海道へ向かいました。フェリーに乗っていたのは約20時間と、二日目の殆どをフェリーで過ごしましたが、フェリーが思いの外豪華であったため、退屈することなく過ごせました。その後は移動し札幌で宿泊しました。

<三日目>入山～旭岳～旭岳キャンプ場

いよいよこの日から登山開始です。午前中に札幌から旭川、目的の旭岳まで移動し、ロープウェイを経て昼より実際に登り始めました。この山は外国人登山客が比較的多かったですが、行き違う人々は皆日本語で挨拶をしてくれました。ルート的にはシンプルでしたがやはり北海道最高峰とされる大雪山系の旭岳山頂に着いたときの喜びは大きかったです。また、北海道（場所が離れていますが）の高校ワンダーフォーゲル部で登山をしていながら大雪山系に登ったことのなかった自分にとってこれは念願叶った瞬間でもありました。その後山頂を越えた側にあるテント場でテント泊をしました。

<四日目>旭岳キャンプ場～白雲避難小屋

この日は5:00に行動開始でしたが天気が非常に悪く、3時間半ほど歩いてたどり着いた白雲避難小屋でその日の行動を終了し、沈殿することになりました。

<五日目>白雲避難小屋～忠別岳～五色岳～ヒサゴ沼避難小屋

この日は朝3時という早い時間に起き、4時10分に行動を開始しました。前日と違って雨は降らず、また途中までは比較的平坦な道が続いていたため行動自体の苦痛は殆どありませんでした。またこの日は特に北海道の独特な山の風景を体感することが出来た日で、本州の山との違いを改めて感じました。目的の避難小屋が見え、もうすぐ到着と誰しもが思ってから実際に到着するまでが長く、この日の難所でした。



<六日目>ヒサゴ沼避難小屋～トムラウシ山～ヒサゴ沼避難小屋

この日は前日同様の時間に起床・行動開始し、旭岳と並んで今回の合宿の目玉であるトムラウシ山のアタックに臨みました。道の大部分が岩場で、岩の上を渡って歩いて行くような行程でした。登り途中は強風が吹きあれ、また雨も降ってきま

したが山頂では奇跡的に晴れ、辺り一帯の景色を堪能できました。本来であればこの日にそのまま一度下山し、一日休み+移動に使った後に十勝岳に単発アタックするという予定でしたが、不慣れな岩場道等の要因でトムラウシアタックに思いの外時間がかかったこと（地図記載タイムの約1.5倍）、再び雨が降ってきたことから下山を諦めもう一日ヒサゴ沼避難小屋に宿泊することとなりました。この合宿で隊列の先頭を歩いていたのはこの日を含め終始自分でしたが、この日の行程において不慣れであったとは言え岩場でもたつきすぎたこと、またそれ以外の平坦道ではメンバーの体力を信じ切っていたが、どこかにあって時間のことを考えずに遅いペースで歩いてしまった事で予定変更を余儀なくされ、結果的に十勝岳に行けなくなってしまった事を考えると非常に悔しさを感じた日でした。

<七日目>ヒサゴ沼避難小屋～化雲岳～天人峡温泉

この日も前二日と同時刻の起床・出発。前日小屋に戻った際、この日どのくらいのタイムを目標に下山するかということを2年生で話し合い、それを意識して臨みました。この日は終始雨で、しかも「アジアの悪路」とも呼ばれるまるで川のような道をひたすら歩く行程で、間違いない今回 の合宿で最も過酷な日だったと思います。これまでの疲労が蓄積し、また度重なってきた雨の影響でメンタルもボロボロになっていましたが、どうにか決めたタイムで降りること、また早くこの雨や悪路から抜け出したいという思いからこれまでの行程と比べてかなりペースを上げて歩き、11:30にゴールの天人峡温泉につきました。その後入った温泉はボロボロになった心身を一気に全快近くまで回復させるレベルで気持ちよかったです。その後は移動し、富良野のキャンプ場で反省会などをやって過ごしました。

<八、九、十日目>移動、観光

残りの日程は観光と移動でした。観光はファーム富田や旭山動物園といった観光地に行ったり、旭川でジンギスカンを食べたり、札幌で小一時間ほど各々自由に巡ったりといった感じでした。そして再び苫小牧からフェリーに乗り敦賀を経て

金沢に帰ってきました。

去年の夏合宿の時は自分はまだ1年生で基本的に先輩方を頼りにしていたが大丈夫と正直思っていましたが今年は後輩があり、自分達2年生も合宿を引っ張っていくメンバーだということを考えさせられることが多々あり、またリーダーも2年生が来年最高学年になったときのことなどを考えて判断を委ねてくれたりとそういう面でもよい経験でした。またこの合宿を終えて、自分はやはり山が好きだということを改めて感じました。来年は自分達が最高学年として夏合宿を組み立て、引っ張る事になりますが、後輩達に山の魅力をはじめとした様々なことを教えて、今年に負けないくらい最高の夏合宿にしたいです。

現役部員一覧

3回生

梅北 浩志諒	岡本 佳乃子
清水 大輔	竹下 あかね
松山 謙佑	村居 龍樹

2回生

天木 智晴	井上 真介
内田 大智	亀谷 英太
坂田 瑞希	少路 拓洋
鈴木 桃世	藤堂 要
中村 亮	松尾 優海
山本 球	横町 航平
和田 友紀乃	渡邊 哲矢
松島 英志	

1回生

大石 越瑠	笠島 聰一郎
木村 聰志	小池 慶哉
後藤 龍佑	宿南 勇斗
成田 純佳	長谷川 舜弥
宮島 明	村井 龍之介
守田 昂樹	森田 岳斗
吉田 優輝	山口 済太郎
川腰 侑椰	墨屋 健太郎
由利 直樹	

平泉寺から白山越前禅定道を歩く

(平泉寺～市ノ瀬)

4期 佐藤 秀紀

越前禅定道は往時越前の人たちが勝山の平泉寺を出發して報恩寺山を登り、小原峠を越え、市ノ瀬に入り、そこから旧白山温泉を経て六万山の尾根を登り、現在の観光新道を通って室堂(越前室)に至った長いルートである。

平泉寺は越前禅定道の拠点(馬場)で正式には平泉寺白山神社。白山開山の越前の僧泰澄によって717年(白山開山と同年)に開かれたといわれる。ちなみに白山三馬場は他に加賀禅定道は白山比咩神社、美濃禪定道は岐阜県白鳥町の長瀧白山神社であり、おおむね平安時代前記(800~900年)にはこれらの三禪定道・三馬場は成立していたといわれる。なお、禪定とは精神をある対象に集中させ、宗教的な精神状態に入ること。また、その精神状態と仏教では言われているそうだが、修験道では聖なる山の山頂を指し、それに向かう道を禪定道となした。また、山頂を登る修行そのものを指すともいわれるようだ。古来、日本では立派な山には神が宿るとされ、また死者の魂は山に帰るとされた。

三馬場の中でも最も強く勢力をもっていたのが平泉寺である。室町時代後半には僧坊6千の大勢力であったといわれる。越前・加賀の白山を巡る権利争いの決着として、江戸時代には白山山頂を含む山麓十八ヶ村は幕府直轄天領となり、白山

そのものは平泉寺に属した。しかし、明治維新の神仏分離、国家神道政策に基づく神社の社格制定により白山比咩神社が白山の支配を得たようである。

開山1300年のこともあり、8月に市ノ瀬から六万山経由で越前禅定道を白山頂上まで歩いたので、前半部を歩きたく、経験豊富な何時もの山登りのリーダーYさんに声を掛け実現した。

本来の越前禅定道は平泉寺から法恩寺山に登り、その先の伏拝から谷川沿いに和佐盛平に下り小原峠を越え、三谷(密谷)を経て市ノ瀬に出るルートである。しかし、和佐盛平に下る道が現在は廃道となっているため降りられない。本当は廃道をヤブ漕ぎをしてでも下りて見たかったのだが、打診したYさんは経ヶ岳への分岐から大舟山経由で赤兎山登山路に合流して小原峠に至る回り道なら歩いたことがあるから案内しようといわれたのでヤブ漕ぎを断念したのである。

9月23日、4時に白山比咩神社に同行4人が集合、二台の車で出発。まず市ノ瀬の三谷林道終点登山口に車を置き、残りの車で平泉寺まで行く。

6:30 平泉寺出発。大きな杉木立の中の石畳の長い参道は歴史を感じさせ厳肅な気持ちを起こさせる。また、滅びしもののあわれも感じさせる。拝殿周辺の一面の緑のコケは見事で静寂感にあふれる。拝殿右横の道を辿り、白山禅定道の標柱を眺めて猪よけの金網屏をくぐって登山道に入る。急な尾根道を登り 8:00 三頭山。近くからスキージャム勝山のゲレンデが眼下に見える。





平泉寺境内

さらにしばらく歩くと9:00立派な中ノ平小屋に着く。ストーブ用の薪が沢山積んでいた。そこから古い石畳の道を経てようやく10:10法恩寺山山頂(1357)に着く。辺りは一面の霧で何も見えないが晴れておれば白山が神々しく見え、禅定道を辿る者の気持ちを高揚させてくれたであろう。しばらく降ると伏拝に至る。白山遥拝所である。ここから昔の禅定道は和佐盛平の方へ下るのであるが、かなり前に廃道になつたらしく、ほとんどその入り口はわからない。

経ヶ岳方向への道を辿るが、ほとんど人が通らないようで道も整備されていなく、次第に笹藪が背丈ほども覆いかぶさり平泳ぎをやる要領で笹をかき分けかき分け進む準やぶ漕ぎ状態になる。



準やぶ漕ぎ

12:20ようやく経ヶ岳分岐の標識に至り、昼食とする。あいかわらず周辺はガス模様で遠くの景色は見えない。13:00大舟山へ向けて出発。尾根歩きで足元は30~40cmほどの低灌木ながらほとんど道はわからず、足の速いリーダーのYさんの後姿を追ながらの下り。そのうちまた背丈を超す木々のため、やぶ漕ぎに近い歩きになり、道が分からなくなつてしまふ迷つたり、道が泥沼で

埋まってやぶ漕ぎ迂回をしなければならなくなつたりで大変な時間がかかった。14:30大舟山、さらに登りを経てようやく16:15赤兎山への登山路に合流した時はほつとした。伏拝みから昼食休憩を除いて5時間の準やぶ漕ぎ道であった。Yさんの話では以前に来た時はこれほどひどくはなく、もっと歩きやすかったそうである。この後の山道はこれまでと比べれば天国のようなもので、16:50小原峠に着く。ここには古い祠があり、ここが禅定道であったことを物語っている。小原峠を下ることしばらく、立派な祠「川上御前社」が復元されている。



川上御前社

祠には泰澄大師が白山の帰路、山頂で拝顔した女神を自ら彫ったといわれる女神像(複製)が安置されているという。谷間の道が薄暗くなりかける17:35三谷登山口にようやく到着。今日の長い山歩きは終わった。しかし、これから平泉寺まで来車を回収に行かねばならない。薄暗くなりかけた未舗装林道を車で下って白峰・谷峠・平泉寺まで1時間余。車を回収して白山比咩神社に着いたのは20時もかなり過ぎていた。

今回の伏拝から経ヶ岳分岐・大舟山を経て赤兎登山路に至るルートは、経験もあり超人的な感覚の持ち主のYさんがおられたから踏破可能であったわけで、安易に足を踏み入れる場所ではない。大変な山行となつたが、めったに経験することができない貴重な体験ともいえ、疲れた身体に満足感が残つた。

(参考にした文献)

- ・下出積香與：「白山の歴史」北国新聞社刊。
- ・石川県自然保護センター：「白山の禅定道」
(白山の自然誌 21)

開山1300年を迎えた白山—かつての白山信仰と、白山山中での昔のくらし—

長岡 正利

はじめに

白山（標高2702m）は、富山・石川・福井・岐阜県にまたがる白山山系（両白山地）の主峰であり、手取川・庄川・九頭竜川の水源地域にあたる。その主要な山域は「白山国立公園」に指定されている。

その山頂部には歴史上の噴火記録のある火口湖もあり、山麓には温泉も多い。森林限界を抜けた山頂部には高山植物が多く、周辺には広大なブナ林が広がる。

かつての白山信仰

山麓から秀麗な姿が望まれる白山は、奈良時代になると修験者の信仰対象の場となったようで、伝承によれば、越前国の修験者・泰澄が養老元（717）年に登頂して「開山」した。今年がその1300年目にあたり、関係の各地では、開山1300年祭が賑やかに催行された。

泰澄は、現・勝山市の東、後に平泉と称されることになる平清水（ひらは崖の古語）で貴女（白山女神）の宣託「我は天嶺にあり・・・」を得た。山頂に登拝した泰澄に翠ヶ池から九頭竜が現れ、更に一心に念ずるうち、白山神の本地である十一面觀音が示現した（写真3・4）。

平安時代には、越前・加賀・美濃から、白山山頂への禅定（登拝）道（図1）が設けられて、各馬場には、平泉寺（写真1・3）・白山寺・長瀧寺が創建された。白山修験は、室町時代には比叡山延暦寺とも結んで大きな勢力となり、全国に白山信仰が広まった。

三馬場のうちで最も繁栄を極めたのが平泉寺で、一向一揆（天正2（1574）年）で全山焼死する以前の、室町・戦国時代の最盛期には48社36堂6000坊の、宗教都市ともいえる規模であった。当時の宏壮な三十三間拝殿の礎石列が現存している（写真1）。

一向一揆の災禍を経た平泉寺は10年後には復興にむかい、江戸時代には、白山山頂に奉納の華麗な銅造

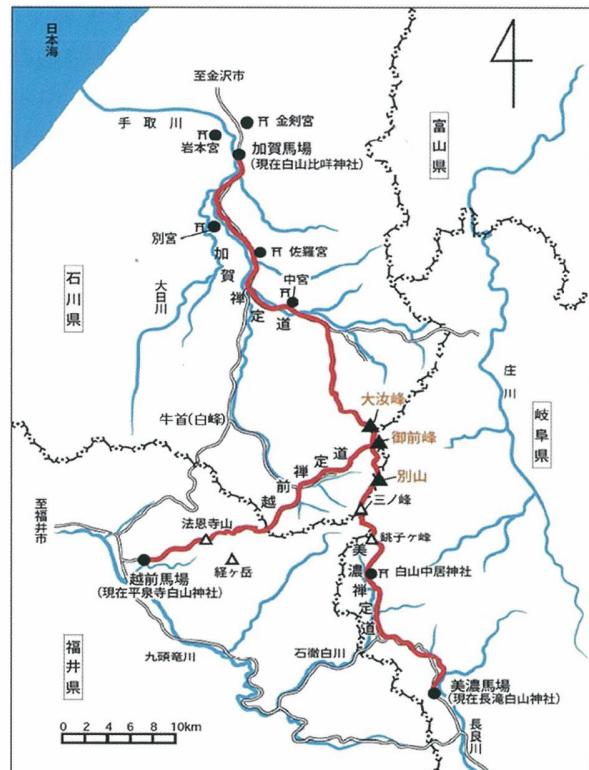


図1 白山の三馬場と禅定道（『白山の自然誌』21「白山の禅定道」）
石川県白山自然保護センター、2001から転載・加筆



写真1 苔が美しい平泉寺白山神社拝殿と、かつての三十三間大拝殿の礎石列



写真2 ①開山1300年祭礼での平泉寺白山神社本殿開扉時の、女神像御前立お顔（ご開帳は33年毎で次回は2025年）。②平泉寺辻觀音堂に伝わる聖觀音菩薩。③平泉寺顯海寺に伝わる阿弥陀如來菩薩（奥州藤原秀衡寄進。一向一揆の際は井戸に沈めて10年後の再興時に曳き上げたとの伝承。）（以上、平泉寺白山神社様・平泉寺乾様・平泉寺顯海寺様のご好意により撮影。）



写真3 平泉寺の御手洗池。1300年前に白山女神が泰澄の前に出現十一面觀音座像(写真6)を鑄造できる工房を有するくらいの都市によみがえった。

しかし、明治維新後の神仏分離・廢仏毀釈は、それまでの神仏習合を強制的に神社と寺に改組し、白山への信仰はかたちを変えることとなった。山頂や各地に置かれていた平安時代以降の仏像などの殆どは破却または別に移され、その一部が各地の寺などに静かに安置されている(写真2・6)。

白山の山頂域にあった仏像の主なものは、明治以



写真4 白山山頂の翠ヶ池。泰澄の祈りに応じて十一面觀音が示現前までは3つの禪定道とは直接の関係がなかった手取川上流の牛首(旧・白峰村)に降ろされて、現存している。(写真6)

明治以降の白山比咩神社を総本社とする白山神社は全国に約2700社といわれる。同神社が総本社となるのは、明治4(1871)年に神祇官が同神社を国弊小社として以降のよう、それ以前は、全国各地の「白山神社」は、「白山權現(社)」や「白山宮」「白山堂」の名が普通であった。

白山山中の昔のくらしー出作り



写真5 白峰大道谷の奥、五十谷にあった出作りの家。①は稻作が行われていた最後の年の新雪。②耕作放棄されて数年後には茅原となり、やがて家は潰れて、③40年後の今は植林された杉が育ち、かつての特徴ある五葉松の梢が杉の樹間に覗くのみ(赤色印の先)。

白山の西側山中には、古くから「出作り」といわれる農業・生活のかたちがあった。無雪期のみに山中に移り住むものから、年間を通してのものまで、様々であった。本村のある谷間沿いには水田適地が少ないとから、山腹で焼畑耕作を主としていたもので、養蚕・炭焼き・林業も盛んであったが、全国におけると同様に

昭和30年代には衰退した。出作りは、その後も細々と行われていたが、高度経済成長の終わり頃には、辺鄙な山間部には住む人々はいなくなり、豪雪地のことわざで人々は自然の中に埋もれ去ってしまった(写真5)。

今、それらの人々と生活のあり様は、白峰にある「石川県立白山ろく民俗資料館」に僅かに残されている。



写真6 ①美濃禪定道石徹白の虚空蔵菩薩(藤原秀衡寄進、重文)。②越前禪定道室堂と③山頂御前ヶ峰から白峰林西寺へ下山の十一面觀音菩薩(前者は重文)。④加賀禪定道檜之新宮から尾添下山仏社へ下山の觀音菩薩。(以上、石徹白大師講上村様・白峰林西寺様・尾添林様のご好意により撮影。)

(11期・長岡によるここまで3頁は、季刊『地図情報』143号の「伊能忠敬特集」に寄稿を依頼されたものを、そのまま転載したものです。それゆえに、このページでは、伊能図との関連を述べたものになっています。)

伊能図に見る白山眺望（本号特集のために）

白山の一帯は豪雪地のため、初夏の頃までは、日本海沿いの平野から白雪の山なみを望見できる。図3のように遙かに濃尾平野と伊勢湾からのほか、北アルプスの山頂からは特徴あるその山容全体が望まれ、紀伊半島の山や南アルプスからも見える。京都の山や神戸の六甲山頂からも、条件が良ければ見える（図2）。

図5は、伊能図中図から白山の東西部分を抽出したもの。山頂に収斂する方位線は、遠くに見える山頂の方位を測定した線で、方位角が記されている。中図には、主な山や島嶼への方位線が描示され、それらは総てがその頂部一点で完全に合致している。それは、測量ではあり得ないことであり、この合致は奇妙である。山は、高さが同じ程度のピークの集合のことがあり、山麓から見ると方位と遠近によっては、異なるピークをその山の最高地点と誤認することもある。本稿冒頭の写真は、既に述べた越前禪定道が県境を越える辺りの取立山からの白山だが、ピークは2つ見える。この見え方は、福井・石川県の平野では同様であって、図5に描かれた白山のようには見えない。図4は、図5での白山への方位線の最南端のものについて、その見え方を「カシミール3D」で再現したもので、その視点からの富士写ヶ岳はその名のように台形に見える山。視点-富士社山（富士写ヶ岳）山頂-白山山頂は直線には並ばない。これをどう考えるかは、読者諸氏の評価にゆだねたい。なお、伊能図での山の殆どは、「山とはかくあるべし」の形で、図4に見るような実際の姿とは異なる。

伊能図は、日本列島の概形を描いてはまぎれもなく高精度かつ美麗な地図ではあるが、図中の山については問題点が種々ある。内陸部で他の測線との連結のない土地の位置については、精度上問題のあるところ（図での白山と飛騨高山の位置関係など）もある。

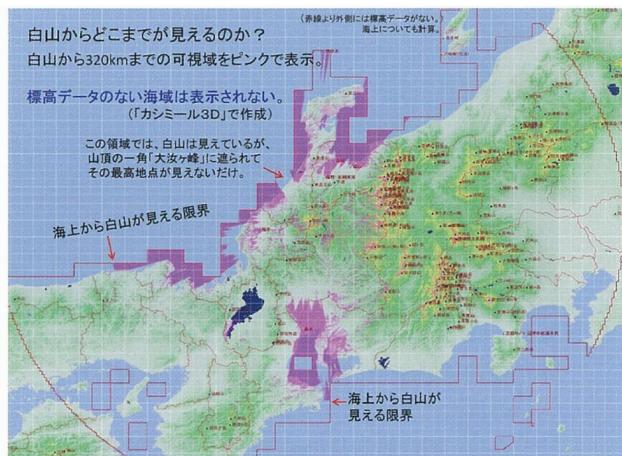


図2 白山を見ることが出来る地域（「カシミール3D」で作成）



図3 かつては名古屋駅ビルから見た白山（金沢大 WV-OB 森川さん撮影：その後にビルの影となって眺望は遮られた。）

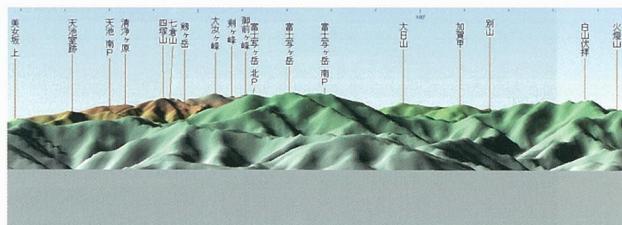


図4 白山に達する方位線（図5）のうち最南の、三国湊近くから見た白山（「カシミール3D」で作成：2つの山は各最高地点が不明で、それらは一直線上にはない。）

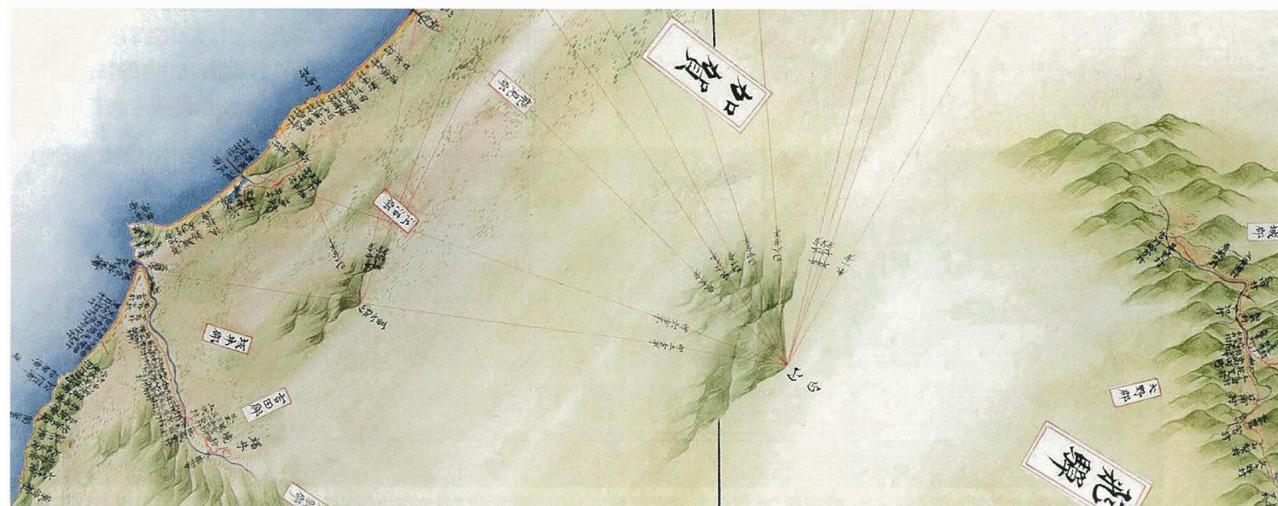


図5 伊能図中図「中部」の、九頭竜川河口～白山～飛騨高山の部分（「東京国立博物館所蔵伊能図による武揚堂『伊能図』（清水・長岡・渡辺・武揚堂編著、2002）」

息子と飯豊連峰を縦走

4期 佐藤 秀紀

●プロローグ

昔登ってみたいと思っていた飯豊連峰の山旅を息子（東京在住、45才）と一緒にやってきた。ふとしたきっかけから、ここ数年息子と山旅をやっている。2014年：宮之浦岳、仙丈岳・甲斐駒ヶ岳、2015年：白峰三山、鳳凰三山、2016年燕岳から蝶ヶ岳。今年は7月12日から16日までの4泊5日の長い日程（山麓1泊、山中3泊）となった飯豊連峰。

●第1日目＜奥胎内ヒュッテ（泊）までの移動＞

8:23 金沢発（はくたか）上越妙高で信越線乗り換え、12:30 新潟着、東京からの息子と合流。13:43 新潟発、羽越本線「中条」下車。タクシーにて奥胎内ヒュッテまで（50分）。なかなか雰囲気のある山中のホテル。客は我々二人だけ。標高340。

●第2日目＜登山口（480）から大石山（1567）までの急登を経て頼母木小屋まで＞

4時起き。おにぎり朝食を済ませて5:30発の乗合タクシー（シーズン中は旅館前に待機）にて土砂降りの雨の中を登山口まで10分程。5:40雨の中、登山口出発。雨具を着ての急登は気温も高くしんどい！ヒメサユリ（ササユリより小型で濃い桃色、可憐。飯豊連峰いたるところに群生して素晴らしい）が所々にあり、慰められる。11:15大石山（1562）の分岐に出る。左をとれば朳差岳（えぶりざしだけ、1636）。12:00頼母木小屋到着。かなり疲れる。小屋の水は湧水をサイホン原理で引いたもので流し放題。冷たくておいしく、ありがたい。この水の有り難さをこの後の日程で何度も思い知らされる。



頼母木小屋の親爺と語らう息子

昼食後、検討の結果（荷物の軽減、天候の回復）、少し早いがこの小屋で泊とすることにする（冷えたビールと勧めてくれた人の良さそうな小屋のおやじの誘惑もあった）。辺りは白いガス。のんびりとおやじと三人でビールを飲みながら山の話。至福の時。泊は我々二人だけ。二階建の避難小屋（ここらの小屋は全て行政（市、町）の所有、管理人に夏期だけ運営委託）のため、小屋構造、運営システムが似ている。トイレは別棟で良く管理されて清潔。大を使用後は微生物分解を促進させるため自転車こぎ20回以上義務。

二人だけでゆったりと小屋を使い、睡眠促進剤もあり、気持ちよく早くから眠りに入る。

●第3日目＜頼母木小屋から地神山・門内岳・北股岳・鳥帽子岳を越えて御西小屋までの旅中最長距離を歩く＞

4時前起床。薄曇りで雲海も見える。冷たい水で顔を洗っていると東の空に雲間から真っ赤なご来光。有り難きかな太陽。

5:15 頼母木小屋発。6:40 地神山（1850）。ミヤマウスユキソウ、イイデリンドウ（固有種、副片が直立する）、ニッコウキスゲ、シャクナゲ、ハクサンチドリ、ウズラバハクサンチドリ、ウラジロヨウラク、ヨツバシオガマなど花が多数。7:45 門内小屋、9:25 北股岳（2024）、10:10 梅花皮（かいらぎ）小屋。小屋に水なく30m離れた水場まで水汲みに行き昼食。イイデリンドウの特徴のはっきりした個体発見。



イイデリンドウ

11:55 鳥帽子岳（1895）、長い雪渓ありアイゼンを着ける。飯豊の特徴はゆったりした尾根と豊富な雪渓であろう。シラネアオイ、ハクサンコザクラ、チングルマ、ハクサンイチゲ（肝心の白山で



鳥帽子岳を下って雪渓を歩く
は珍しい)、ニッコウキスゲなど。15:00 今日の宿泊の御西小屋到着。水は無く、大日岳方向に300mほど下った雪渓の雪解け水を汲みに行く。夕食・朝食分の水を補給。とりあえずビールで乾杯。よく歩いた! 本日の宿泊者は他に団体の7人。

●第4日目<大日岳往復、飯豊山、本山小屋、切合小屋を経て三国小屋まで>



大日岳

5:15 小屋から大日岳(2128、飯豊連峰中最高峰)往復。8:15 小屋発。御西岳を経て雄大な高原を行く。9:45 主峰の飯豊山(2105)山頂に至る。



飯豊山山頂

10:10 本山小屋にて飯豊山神社に詣でる。本山小屋では水を売っていた。岩場(御秘所)を経て12:00 切合小屋着。宿泊の三国小屋には水がないので汲みためていく。14:20 三国小屋着。最後の夜は翌朝下る剣ヶ峰の岩場のことが気にかかりうまく眠れず。

●第5日目<剣ヶ峰を経て川入まで下り山歩きは終了>

5:10 小屋発。ストックを仕舞って、剣ヶ峰の岩場にとりかかる。思ったほどの厳しさはなく慎重に降る。



剣ヶ峰の岩場に行く

6:20 水場。湧水が出ており、おいしい。上・中・下十五里の標識を経てブナ林をひたすら下る。8:20 御沢登山口到着。長い山歩きは終わった。

キャンプサイトを経て川入バス停まで林道を歩く。9:05 バス停着。時間があるので谷川に入り足を流れに浸し、川縁でしばし昼寝。10:30 バス発(3人)。途中の「いいでの湯」で下車。温泉に入つて4日間の汗を流し、ビールで乾杯し長かった山旅の無事終了を祝う。タクシーにて山都駅まで。15:01 山都駅発。東京へ帰る息子と次回の山行を約して別れる。17:11 新津着。17:18 新津から19:29 妙高高原着。20:15 妙高高原発、21:19 金沢着。念願の長い山行の旅は終わった。

●エピローグ

重い荷物(小屋は食事・寝具提供無し、所によつては水も無し。寝袋、アイゼン、3日分食料など)を担いでの長旅で最初は少し不安であったが、心配の天候も登山一日目の雨を除けば3日間とも雨無しに恵まれ、雄大な雪渓とたおやかな山並みの尾根歩き、種々の高山植物を楽しんだ思い出深い山行となつた。良き相棒、息子に感謝。

マレイシア・キナバル山登頂記

6期 合津 尚

後期高齢者から更に名誉？な喜寿となり、なにか記念行事と思案の末に東南アジアでの最高峰にチャレンジすることにした。高齢者故に健康診断書の提示を求められたが、無事にツアーに参加させてもらった。リーダーを含めて13名で、そのうち女性が5名に老人を含んだパーティになつた。

キナバル山は標高4095.2mある高山で、赤道直下のマレイシア国ボルネオ島にあります。この島は日本の本島と同じくらいの面積で、半分はインドネシアと一部が石油の出るブルネイです。島の人口は1千万人程で、マレー人75%と中国人が20%その他です。山は花崗岩の独立峰で比較的に海岸に近いので、写真-1に示したが、雲が発生しやすいようだ。赤道直下のために四季が無く、情報によれば気温の変化はほとんど23~32°Cで目立った雨季は無く、11月から2月には多少降水量が多くなる程度。



写真-1

9月22日 登山入り口にて

9月21日にマラソンの会の知人を含めて成田から、ボルネオ島の都会であるコタキナバルへの直行便に乗った。ダイレクト便なので6時間程で到着し、当日は市内のホテル泊。この街には数十年前に仕事で来たことがあったが、当時の面影は無かった。翌日はバスで2時間程の移動で登山口に着き、入山手続きをした。自然遺産でもありルールがかなり厳しい。入山者の外国人は80人/日、地元を含めて山小屋の容量300人程度までで、予約制で日本の登山事情とは大いぶ異なる。管理事務所でWaiver(権利放棄書)にパスポートを見せてサインをさせられた。これは「自然の中での不

確定要素と危険の存在に対して法的な権利を放棄する」との自己責任を認める書面であった。ここでIDカードを渡されて、これが入山許可証になる。

登山ルートは大変に整備されており、かなりの急登だが階段状になっており幅も広い。全員の荷物の大半はポーターに預けるので楽であるが、更にガイドは5人について1人の割合で雇う仕組みのようだ。山小屋の必需品も全て人力で運ぶそうで、地元の経済に寄与する仕組みになっている。登山口の1800mから山小屋のある3300mまで途中に7か所シエルターと称する東屋風の小屋と水洗式トイレが設けられている。道はあまり密度がない樹林帯が続き、有名なウツボカズラが散見されたが、花やラン類や蝶などは期待した程ではなかった。山小屋は写真-2に示したがホテルのよう日本的小屋のイメージとは異なる。食事はバイキング式で、部屋は6~12人収容の2段ベットでゆとりがあった。



写真-2

9月22日に宿泊したホテル風山小屋

壁には負傷者を担架で下す写真が多数掲示されていた。すべて人力であり、ヘリは使用しないとのこと。高度3,300mもあり高山病対策のために飲酒は禁止して早々に就寝。

翌朝は1時半に起床し、2時半に出発。暗闇の間を急な階段を登る、下界の夜景がきれいだ。風が強く花崗岩の岩肌がむき出しており、滑落事故の可能性は確かに高いと思った。この山の花崗岩は北アの燕岳などがザラメ状に風化するのと異なり、10cmほどの厚さで殻のように剥離する性質のこと。したがって表面には砂利が存在しないので滑りにくいメリットがあった。気温が高いた

めか黒カビが表面に発生して、外見が黒々になる。
写真-3 で示すが、古い岩肌は水墨画風にみえる。



写真-3

9月23日早朝の登りの階段と岩肌

最近地震があり風化した表面が剥離し落下した後は雪渓のように白く光っている場所もあった。

標高3800mの場所に最後のシェルターとIDカードのチェックポイントがあった。ここからは設置されたロープを使っての登りとなり、腕力も必要になる。周りはまだ暗闇であり、斜面の上下に登山者のライトの光が続く。ようやく明るくなったのは標高4000m付近から。高山病なのか体力不足なのかバランスが悪く、両手両足を使ってやっと頂上にたどり着いたのは8時過ぎ。幸いにも曇り空であったが視界が良く、素晴らしい雲海が見えた。記念撮影（写真-4）をして9時下山開始したが、登りよりもこちらが大いに転倒の危険があり、やはり両手両足のいわゆるバックステップで下山した（写真-5）。



写真-4

「キナバル山の頂上にて」



写真-5

キナバル山頂と下山路

若い人は苦も無く動いているが、老人は見栄を張らず慎重を期した。

赤道直下の樹林帯であるが、高山のために多様な植生は観察できなかったのは、少しばかり残念でした。ウツボカズラの他はシャクナゲ風の花とランが散見されただけ。当然かの有名なラフレシア（低地の密林で咲く大型の腐臭の赤い花）やオランウータンなどにはお目にかかるのは当然でした。

我ら千葉組5人衆

9期 千葉組

KUWV9期の我ら、称して不良老人千葉組5人衆。年に数回の山行とゴルフそして飲み会を行っています。

メンバーは千葉県北西部に住む伊藤俊成、伊藤博道、清水一、鍋島武と吉田洋次郎（敬称略）です。ではその組員の近況を紹介します。

伊藤俊成はゴルフと飲み会の段取り役。絶妙のタイミングでお誘いがかかります。ゴルフでは他のメンバーからがっぽり稼いでいるようです。

飲み会は船橋近辺の居酒屋かたまには韓国料理・中華料理屋です。ちょっと前までは飲み放題を予約し、底なしの飲みっぷりで店の経営をかなり圧迫したようです。でも近頃は年齢とともに酒量が減り（？）、料理だけ予約するようしたそうです。

中国には「麒麟も老いれば駄馬になる」という言い伝えがあるそうですが、でも千葉のウワバミはいつまでたっても衰えを知らないようです。



飲み会（伊豆）にて

伊藤博道は飲み会の会計係、元銀行員の経験を活かしてきちんと割り勘の負担額を素早く計算してくれます。最近は囲碁にのめり込んでいて勝ち負けに一喜一憂しているようです。

清水一は現役の司法書士。世のため他人のため社会正義に務めています。最近は足の調子が悪く、山行に参加できないのが残念です。

鍋島武は山行の幹事役。メンバーの体力に合わせて関東近辺の日帰り登山計画を綿密に練ってくれます。彼は下山後、赤ちようぢんに立ち寄れる山を選んで見繕っているのではと筆者はうがった見方をしています。そんな彼は山行記録をきちんと整理していて、その出来栄えは素人とは思

えないほど見事です。

吉田はまったくおんぶにだっこで声がかかれば山行・飲み会に付いていくという楽な生き方をしています。



日光鳴虫山にて

そうそう忘れてはいけませんもう一人、オプザーバー参加するのが都内に住み伊豆に温泉付きの別荘を持つ山中重夫（敬称略）です。いつまでたっても抜けない関西弁と豊富な話題で、山行に彼が加われば“熊避けの鈴”も不要です。



岩殿山（大月市）にて



筑波山にて

こんな我々も飲み会での最近の話題は終活です。残す財産はないから相続争いは起きないだろうけど、残されて迷惑な物を今のうちにどう片付けるか。時間はたっぷりあるのに手付かず状態です。

我々が知り合って半世紀。さていつまで・・・。

（文責：吉田洋次郎）

つれづれなるままに

15期 舟田 節子

◆回顧のお年頃

「異常気象の夏」を、毎年繰り返していますが、この夏も、そうでした。北陸に関しては、8月2日によく梅雨明けしたと思えば、その4日後にはもう大型台風5号の雲が伸びてきました。

その間隙を縫って、金沢の地の利ならこそ、白馬での夏山を満喫できました。



8/4 白馬大雪渓にて

しかし、大雪渓に深々と刻まれたクレバス。アイストンネルも拡大し続いているとのこと。さらには7月初めの集中豪雨による大量の落石が、雪面に広がっていました。ちなみに小雪だった昨年は、9月1日から大雪渓は通行不可になっていました。

これまで、こんなことはなかった…。能天気に夏山JOY!と歓喜できた時代が終わったのではないか…の嘆息に、あの頃はこうだった、それなのに今は…の繰り言が連なっていきます。そんな「お年頃」(?)なのですね。

◆「せっかち」に軍配

さて、百名山の仕上げにかかっていた2010年の夏は、毎週のように深夜バスに乗り、東京発ツアーハウスに参加していました。往復で6400円! 早朝の新宿に横付してもらえば、ちょうど、集合時刻に間に合いました。初日はどのみち、半日から一日は登山口への移動に費やすことになります。ですから、体力的に「無茶」には相当しませんでした(その頃は)。

それまでは、行きたい山へ行こうとすれば、周囲に数々の障害があるものでした。それらの多くがやっと取り除かれて、改めて検討してみれば、「知らない山」と、「そこまでのアクセス」は、やはり、あまりにも難題でした。

それが、電話で予約さえすれば「行ける」になるのです。すごい可能性を手に入れたと思い、嬉々と出かけたものでした。地方都市金沢で、山にからんだ人間関係やらノルマやらで、カレンダーが悶々と埋まっていくより、カタログを眺めて、電話して、「やったあ! 行くぞ!」になれるのは、うきうき、ワクワクする時間でした。

ところが、深夜バス事故がおきてからはボンと値上げ。さらに鍛治橋ターミナルでの定時発着というシステムに変わり、最終SAでたっぷり時間調整してから東京入りという「融通のなさ」になりました。

どう地団太踏んでも、集合時刻に間に合わない! 前日から新幹線で移動したうえ前泊なんて、時間ロスも金銭ロスも甚だしい!

もちろん、それからも、「吾妻連峰を避難小屋泊まりで縦走したい」、「ミヤマキリシマに染まる時期の九重連山を歩きたい」の時には、東京発ツアーハウスを選びました。時間やお金がもったいない! …には、上野での美術館巡りや、旧友とのデートをからませる知恵を駆使しました。

でも、百名山の後、二百名山、三百名山への発想にならなかつたのは、これが主因です。それに、ちょうど体力も急降下していきました。

「山は逃げない」けれど、動くなら、一日でも若いうちに、無理が無理にならないうちに…と、お薦めします。

また、その前に、東日本大震災もおきていました。そのせいで、百名山完登の夢が、数年延びてしまつた人を何人も知っています。そんなことを到底口にできない時間が流れていきました。

前述の吾妻連峰の時など、一切経山の噴火が活発化したうえ、有料道路を無料にしても、観光客数が復活していませんでした。東京都民であれば、ツアーハウス料金は割引などという、不思議な支援策がとられても登山客数は回復していかず、整備の手が回らない山中では、やむなくの迂回もありまし

た。

山遊びなんて、家庭が平和で無事でを前提として、楽しめるレジャーですが、それ以前に、日本が平和で安泰でないと、成り立ちません。

なので、私にすれば、大震災というと、不謹慎ながら、「それまでに百名山がもう済んでいてよかったです！」の連想になっています。

「せっかち」気味に動いていれば、どれだけかは実現できます。一日一日、自分の体は衰えていく。周囲も衰えていく。そして碌でもない話の方がかりが確実に増えていきます。

過ぎてみれば、時を得て動けていた日々だったのでした。百名山狂騒曲が鳴り響いていた、慌しかった最後の夏を懐かしく思い出します。

◆日本百名山攻略！

百名山詣では、最終の山をどこにするか？と、終盤をどんな攻め方にするか？に、個性や事情がからんできます。

私の場合は、そもそもが、地元バスツアーアー会社が百名山ツアーを始めたのがきっかけでした。しかも、儲かるように、遠隔地を優先にツアーが組まれていました。妥当なら、遠くて足を引っ張ることになる筈の北海道や九州の山々の方が、先に消化できてしましました。それで、「なら、仕上げてみるか」の気になったのです。

当時はまだ学習塾をやっていて、夏休みは普段より多忙になってしまふ境遇でした。夏山JOYなんて、1回の北アルプス確保がやっとの有様。自分で海峡を越えて遠征なんて、やりようがない。だから百名山も論外の話だったのです。

その後も、地元発百名山ツアーの常連客になり、着々と数を稼いでいきました。

ところが、あと幾つの段階に入ってきた頃には、地元ツアーアー会社とは日程が合わなくなってきてしまいました、週末の名山の山小屋は、先行大手ツアーアー会社が抑えこんでしまっていて、後発会社は、やむなく平日発の日程での募集となるのです。あるいは時期外れといえる週末の設定になっていました。

その頃高校非常勤講師に転職していた私は、夏

休みを盛大に使えるようになった替り、平日発分の休みがとれなくなっていました。

それで週末設定の東京発大手ツアーツアーレベルの利用を決意しました。しかしながら、金沢から近い北アルプスの場合、東京迂回はいくらなんでも馬鹿げている！になります。

ならば、どう仕上げるか？

対策を練った時点では、残っていたのが、11山…十勝岳、朝日岳、飯豊山、会津駒ヶ岳、至仏山、高妻山、鹿島槍ヶ岳、水晶岳、空木岳、悪沢岳、赤石岳。

それらをツアーカタログで調べまくり、旦那アッシーをからめて立案。

7/3～4 会津駒ヶ岳 東京発ツアーツアーレベル

7/10～11 至仏山 夫婦登山

7/16～19 飯豊山 東京発ツアーツアーレベル

7/23～25 上富良野岳～十勝岳 東京発ツアーレベル

7/30～8/1 以東岳～大朝日岳 東京発ツアーレベル

8/6～9 千枚岳～悪沢岳～赤石岳 東京発ツアーレベル

8/13～16 烏帽子岳～水晶、鹿島槍 夫婦登山

8/21～22 高妻山 夫婦登山

8/28～30 木曽駒～宝剣岳～空木岳 東京発ツアーレベル

これらは、東京発で狙うのが妥当な山を優先していった結果、さらには、100山目は、完登を祝ってくれるという木曽殿山荘を擁した空木岳…と決めた結果のスケジュールでした。

このうち、水晶岳は、大晴天の日に、雲ノ平から岩苔乗越へ上がり、「水晶も往復してこよう」と言ったのに、旦那が嫌がりバスしたため、ど真ん中に残してしまった山。

そして、鹿島槍はこれまた、種池から爺を越え、往復して冷池泊まりのつもりが、「台風の影響が出ないうちに」（慎重派の旦那の意見）と、赤岩尾根下りに急変更となり（妻の判断では、十分に行けた！）、一日早く下ってしまったため外した山でした。

あちこちから度々眺めていたながら、実はピークを踏んでいなかったのです。

◆ 97, 98 山目

「あんたの優柔不断のせいで、こんなど真ん中が残ってしまったわ！」と文句を言い立てて、連

覇（？）のアッサーに仕立てたのが、8月13日の盆休みのことでした。

こんなこと、来年まで持ち越したくない。来年も行ける補償なんてない。連ちゃんの今の方が、かえって体調がいい。（ザックも山服も、座敷の一隅に常時待機していました。）

山は基本的に、夏がベストシーズンです。小屋が営業している、多数の登山客が往来している、アクセスも夏山ダイヤになり便利。天気を含めて、軟弱者が臨機応変をやれ、少々無茶をやれるのも、夏に限った話です。

2010年のお盆休み中の天気予報は、そもそもひどくはない…程度でした。

初日は七倉からブナ立尾根を上がり、鳥帽子小屋へ。

ここで、東京発ツアーで馴染みになったTLと出会いました。彼ら一行は槍まで大縦走の予定です。天候は思ったより下り坂、ここからさらに入り込むかどうか、思案のしどころだったようです。

私達の方は、真砂岳からピストンで水晶、そして湯俣へ下りだから、尾根筋の半日が持ってくれれば…が判断基準でした。

さて明けた翌日、昨日見えていた黒々しい水晶岳も含め、全てがガスの中でした。そして猛烈な風。野口五郎小屋でしばし待機してから出発すると、前方を行くアベックのザックカバーが散々はためいた後、吹っ飛んでいきました。

真砂岳で、（奥様は）予定通りの水晶ピストンを決めました。水晶小屋は、ずぶ濡れ登山者で一杯。「ここで待っている」という旦那を置いて、水晶頂上をピストン。「温かい雨」をぬぐいながら…でした。冷たかったら、こんなこと、やってられません。ふいに現れた頂上標柱の前で、必死で証拠の自撮りをやって、引き返し。小屋前でそくさと昼食をとて下山。

真砂岳から稜線を離れると、風は收まりました。しかし竹村新道は、静かなエスケープルートです。ろくな標識がなく、周囲は見えずのまま、初めて登り客と交差しました。なんかのセミナーの老教授と、学生達という雰囲気でした。

ようやく出てきたピークの標識で、予想より2

時間遅れの地点にいると判明。猛然とスピードアップするも、山連チャンの私と違い、一か月ぶりの旦那の方は「付いていけん。先に宿へ行ってくれ」。私は私で、「鳥帽子発の中年夫婦がどの小屋にも着いていない」なんて連絡が回ったら…と、気が気でなく、さらに飛ばし下ります。

湯俣温泉晴嵐荘に着いた途端、夜の帳が下り、豪雨になりました。おろおろと窓から眺めるも旦那は着かない…。救いは、老教授とセミナー学生一行がまだ下りてきていないことでした。妥当なら、彼らの方が旦那より後ろにいることになるのですから。

宿で待機していた学生達が「遅すぎる」と右往左往し始め、宿のスタッフ達と救援に出掛ける様子。雨の中をライトが行き交います。

意を決して「すみません、うちの旦那も探して下さい」と、言いに行こうと、下へ下りたら、なんと、玄関にへばって座りこんでいる旦那の背中が見えました。

こちらもヘナヘナとなる心地で、「もおお。『救助に行って下さい』と頼もうと思つて降りてきたところよ」と言うと、「いやもう真っ暗になつてしまつて。小屋の灯りの方は、かえってはつきり見たから、それは安心だった。そやけどヘッドランプの届く範囲が狭くて、ゆっくりでしか歩けなかつた。後ろにまだ人がいたし、迎えの人達が上がっても来たから、遭難するとは思わなかつたけど…」の弁。

スタッフに遅着を叱られ、平身低頭ながらも、安堵で浸かつた、結構な温泉でした。

思いおこせば、この湯俣温泉（湯俣山荘）へは、高校2年生の時に、家族登山でエスケープルートとして、当時の伊藤新道で下りてきています。

あの時は、父親が地域の診療所を引き継ぎ、3年にわたる盆正月もない日々を過ごしてからの、満を持しての折立からの大縦走でした。開業が軌道に乗ったといえる頃といつても、周囲の開業医に気になる患者を委託手配してでも、縦走に出ようとした父の山恋心に、今の方が、もっと感心してしまいます。当時の私は、「家族揃って」が最優先とされて、テニスの試合をパスする羽目にな

り、相棒にすまなくてむくれていました。「親の勝手」の思いが強くて、父の立場や情熱の方へは思い至りませんでした。

私も海外トレッキングに際しては、「思い切ったことを」のような言わわれ方をすることがあります、この頃の父の比ではありません。結局のところ、影響されているのです。DNA の他に、判断基準とか価値観のあたりを受け継いでしまうものなのです。行動力を与えてくれたことには感謝です。



7/16 カムチャッカ半島フラワーハイキング

さて、翌日は高瀬川沿いに猛然と下り。なんでこんな辺鄙な所にまだ温泉が？道が？の謎は、北鎌尾根への道標があつて、解けました。北鎌尾根がどこからとりつく？なんて考えたこともなかつたので、納得しました。

さらに醉狂後半戦の始まりです。たどりついたマイカーの中で着替え、ザックの中身も更新して、扇沢手前で下ろしてもらいました。柏原新道を上がり、冷池山荘へ。翌日、3時半に出発し、やはりガスの中の鹿島槍ヶ岳に登頂し、証拠写真を撮ってもらい98山目としました。柏原新道を経由して走り、11時に下山。5分も待たずに旦那と合流できました。昨日はアルペングルートで時間潰しをしたという旦那は、汗臭さで顰蹙をかつていたらしいです。

◆エピローグ

99山目の高妻山は、親指の爪を真っ黒にした旦那は登らずにアッサーのみ。ここもまた私の単独行での登頂となりました。

そして、奥名さんや、ナカオの仲間に作っても

らった完登幕と、同行仲間に配る長生殿の小墨11箱を詰めて、中ア縦走に向かい百名山の仕上げとしました。

あれからも、NHKのお蔭で、長々と余韻を楽しませてもらっています。「やった！」といえる思い出をもてるのはありがたいことです。そしてきつかったことの方がとておきの思い出になるのも、人の常ですね。

今年の高山は、9月30日～10月1日の妙高山で終了した…となりそうです。山遊びに旦那を巻き込んだお蔭で、好天を狙い定めてさっと動く…が、やれています。

また、最近は、元卒論指導教官が理事長をしているご縁で、「チョウゲンボウ」という、e教育サロンの月刊機関誌の裏表紙（たまに表紙も）に山と花の写真を利用して頂けるようになりました。

昔は3Kといわれて、変人の趣味だったような山遊びが、縦にも横にも、時間軸でも、ご縁をつなぐようになりました。これもあります。



10/1 妙高山にて

やたら遡って思い出したり、ありがたがってみたり…。どうも、立派な高齢者になってきたようです。

【1】二十四節気

『二十四節気』は中国の無形文化遺産だ。

2016年11月、日本が推薦していた『山・鉢・屋台行事』(18府県33件)がユネスコの無形文化遺産として登録された。能登の青柏祭の曳山行事を始め、石川、富山、岐阜、愛知、三重5県だけで15件を占め、連日、地元メディアはこの慶事を大きく取り上げた。この時、他の国の多くの案件も無形文化遺産に登録された。その一つが中国の推薦した『二十四節気 (The Twenty-Four Solar Terms)』だ。古代中国で発明された『二十四節気』は、太陽の1年の周期を基に作られた「光のカレンダー」だ。日本へは飛鳥時代に伝わったとされる。立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至などは馴染み深く、僕は日本古来のものと思い込んでいた。『二十四節気』は太陽の光量変化の区分なので、実際に気温が変わらには1ヶ月程度の遅れがある。寒のさなかに立春と言われてもピンとこないが、季節の到来を早めに察知して農作業の準備に入ることができるので、この「光のカレンダー」は日本でも重用されてきたのだろう。

名古屋の実家近くに広大な雑木林(相生山)がある。子供の頃はよく遊んだが、その後ほとんど立ち入ることはなかった。リタイアしてからこの雑木林を散策するようになって季節の微妙な移ろいを知り、『二十四節気』の意味合いがようやく分かりかけてきた。

春【立春～穀雨】(新暦 2月～4月)

雪国ほど春の訪れは顕著ではないが、日差しの変化で春の訪れを感じることが出来る。まさに「光の春」だ。3月になると急に鳥が少なくなる。冬鳥が北へ帰っていくのだ。3月も下旬となれば桜が咲き、草木の季節に移っていく。

夏【立夏～大暑】(5月～7月)

5月は若葉がさわやかだ。紫色の藤の花が彩を添える。相生山には陸生のヒメボタルがあちこちにいて、5月半ば、夜の雑木林を舞う。都市部では、ここは日本を代表するヒメボタルの生息地のひとつだ。ホタルの季節が終わると夏草が猛烈な勢いで茂り始め、スズメバチが出没し、やぶ蚊が多くなる。散歩は落ち葉の季節までお預けだ。7

月にはいると蝉の初鳴きがある。昔はアブラゼミ、ニイニイゼミだったが、温暖化の影響かニイニイゼミは姿を消し今やクマゼミの大合唱だ。

留鳥のコゲラ〈キツツキ〉も時折、姿を見せる。



【コゲラ】

秋【立秋～霜降】(8月～10月)

お盆を過ぎると暑さが和らぎ、蝉もいつの間にかいなくなる。10月になると、雑木林の大半を占めるコナラが色づく。どんぐりに、落葉〈コナラ〉と常緑〈アラカシ〉の2種類あることを、この年齢になるまで知らなかつた。

冬【立冬～大寒】(11月～1月)

冬枯れの雑木林は美しい。冬は鳥を見る季節だ。オオタカも目撃されるようになる。ジョウビタキやツグミ、シロハラなどの冬鳥たちが北方からやってくる。(相生山ではツグミを狙った違法なカスミ網猟が1960年代まで行われていた。)ギフチョウの食草であるカンアオイの自生地がいくつもあり、11月、ものすごく地味な花を咲かせる。そして季節は巡り、春を迎える。

【2】ふるさとの雑木林は防空緑地

名古屋の地形は西が平らで東が丘で、丘は象が西を向いたような形をしている。額の部分に名古屋城。長く垂れた鼻に熱田神宮があり、先端部に東海道五十三次の「熱田宿(宮の宿)」がある。NHK『ブランモリ』(6月放送)でタモリと近江友里恵アナが歩いたのはこの熱田台地だ。象の後ろ足やお尻はそのまま東部の尾張丘陵へと連なっている。ふるさとの雑木林がある相生山は名古屋市南東部にあり、象の後ろ足を支える台座だ。

1940年、「防空法」により相生山は防空緑地に指定された。当時、相生山の東側は雑木林がなだらかに続き、三方には田んぼや畠、小川、ため池

など里山の風景が広がっていた。1960年代の開発ラッシュで、周辺の雑木林や田畠はすべて大規模団地や住宅地になってしまったが、緑地指定が解除されなかつたおかげで相生山の自然は奇跡的に守られた。都市公園として整備される予定だが、用地買収は進まず、大半が雑木林のままだ。大きな台形をした相生山は、面積123.7ha（金沢大学角間キャンパス：200ha）、最高地点62m、地下鉄が通る幹線道路との比高差50m。外周をゆっくり歩くと2時間近くかかる。雑木林にはタヌキが棲み野鳥も多い。相生山は西へゆるやかに傾斜しており、西端からは名古屋市が一望できる。市街地の向こうには鈴鹿山脈、養老山地、伊吹山。目を北に転じれば御嶽山が望める。

時計を巻き戻し、戦中と戦後占領期の名古屋を相生山から見てみよう。

【3】米軍の空爆（1944年～1945年）

B29による空爆は1944年12月に始まった。名古屋は日本の航空機産業的一大拠点として、東京に次ぐ大規模な空爆が行なわれた。市内の主な目標は、三菱重工名古屋航空機製作所、三菱重工名古屋発動機製作所、愛知航空機・愛知時計電機、名古屋陸軍造兵廠。各軍需工場では、多くの動員学徒や徴用工が働いていた。宮崎駿監督のアニメ映画『風立ちぬ』（2013年）の舞台となったのは港区の三菱重工名古屋航空機製作所だ。ここに堀越二郎がいてゼロ戦が設計・組み立てられていた。焼夷弾による無差別空爆

日本への空爆で使用されたM69焼夷弾は六角形の筒型（長さ50cm、直径8cm）。重さ2.5kg。この焼夷弾がE46クラスター弾に38個収納されて高度600mで散開し、豪雨のように降り注いだ。

米軍の空爆の事前調査は徹底していた。鉄を多用した工場へは爆弾を、木と紙でできた住宅には焼夷弾を使った。橋の材質も調べ上げ、鉄やコンクリート製の橋へは爆弾を、木製の橋へは焼夷弾を投下し、逃げ惑う人々の退路を断ち、更に容赦なく焼夷弾の雨を降らせた。「防空法」に基づく防空体制や隣組の避難訓練がなんの役にも立たないことを人々は思い知らされた。家を焼き払い市民を殺し尽くす空爆で、名古屋の中心部は焦土と化した。疎開による転出で人口は半減した。

[134万人（1944年）→60万人（1945年11月）]

1945年5月の空爆で名古屋城は全焼した。なごや人はこれで名古屋も終わりだと思い、敗戦を覚悟したことだろう。米軍の空爆で、本丸御殿を始め名古屋にあった国宝（名古屋東照宮、名古屋最大の長福寺など）の大半が焼失した。無差別空爆は郊外の田園地帯にも及んだ。1945年6月、実家のある村（百数十戸）を狙って焼夷弾が投下され、23戸が全焼した。祖父母は屋根に上がって必死に火を消したという。祖父母の話から、フランシス・コッポラ監督の映画『地獄の黙示録』（1979年）を思い出した。ワーグナー「ワルキューレの騎行」の曲をバックに、ベトナムの農村地帯を米軍の武装ヘリが次々と攻撃していくのだ。

祖母が存命だったころ、防空頭巾が古い箪笥の奥から出てきた。捨てようとしたら、祖母から「また使う時が来るかもしれない、捨てたらいかんがね！」と言われ、捨てるに捨てられず今に至る。爆弾池と爆弾穴

相生山とその周辺には焼夷弾だけでなく爆弾も投下された。南わずか1kmのところに住友金属の軍需工場があったので、とばっちりで爆弾が落ちたのかもしれない。防空壕に避難しても、直撃すればひとたまりもない。

戦後、「爆弾池」と呼ばれる直径10mの見事に円形の池が、田んぼの中に点在していた。1トン爆弾でできた池だと言われていた。小学生の頃、友達と魚釣りをしてよく遊んだが、すり鉢状の池の為、大人たちから絶対に池に入るなど教わった。この「爆弾池」は1960年代の宅地開発で水田と共に姿を消したが「爆弾穴」は今も残っている。相生山には9ヶ所の「爆弾穴」が確認されており、内1ヶ所（直径10m、深さ2m）には案内板も設置されている。



【爆弾穴（右に案内板）】

【4】占領期（1945年～1952年）

名古屋は中部地方で唯一米軍が駐留した（第25師団司令部が置かれた）都市で、ピーク時の1945年12月、米兵の数は3万2000を超えた。市内で二百数十か所に及ぶ建物が接收されて星条旗が翻り、“JAP Off Limits”（日本人立ち入り禁止）となった。旧日本軍の司令部や基地、三菱などの軍需工場、官公庁の建物、さらには、将校用に民間の住宅まで接收された。大学病院も米軍に接收され、重症者を含むすべての患者が即時退去を命じられた。街には英語が氾濫した。道路標識に始まり、役所、学校、銀行、会社の建物から寺や神社に至るまで、英語表記が押し付けられたのだ。名古屋市内の様相は米軍の占領で一変した。

アメリカ村（1946年～1958年）

1946年、中心部の白川地区に「アメリカ村（米軍の家族住宅130戸）」が出現した。材木一本、釘一本調達するのも大変な時に、米軍の命令で3週間の突貫工事で作られたという。緑の芝庭のある白い板壁の家が等間隔で建ち並ぶそこはMPが巡回する別世界だ。「アメリカ村」の鉄条網の外にはバラックが乱立し、飢えた人々が米軍の残飯をあさっていた。2万5千分1地形図「名古屋南部」（1947年修正測図）には白川地区が「アメリカ村」と記載されている。大阪ミナミより20年以上も前に「アメリカ村」があったのだ。返還されたのは占領が終わって実に6年後の1958年だった。今は、科学館と美術館のある緑豊かな「白川公園」として、市民の憩いの場となっている。

オキュパイド・ジャパン（1947年～1952年）

日本の貿易が再開されたのは1947年だ。しかしGHQにより、日本製品には”Made in Occupied Japan（占領下日本製）”という表示が義務付けられた。実家近くの住友金属の軍需工場は洋食器工場に生まれ変わり、“Occupied Japan”が量産された。名古屋や瀬戸で大量に作られた磁器やノベルティが海を渡り、貴重な外貨を稼いだ。海外向けなので国内に出回ることはなかったが、叔父が洋食器工場に勤めていたので、我が家にもこの刻印の食器がある。米国にはコレクターが多い。将棋の藤井聰太四段で有名になった瀬戸市にある美術館では、今年貿易再開70周年を記念し、米国からの里帰り展『戦後の復興を支えたやきもの Made in Occupied Japan』が開催された。



【洋皿裏の刻印（OCCUPIED JAPAN）】

アリスちゃんと「チエちゃん」

1950年代、相生山の雑木林に隠れるようにして小さな掘立小屋があり、日本人の母親と娘のアリスちゃんが住んでいた。手元に実家で撮った1枚の写真がある。僕の姉や近所の女の子たちが仲良く並ぶ真ん中に、アリスちゃんが笑顔で立っている。明らかに黒人との混血とわかる褐色の肌をした少女だ。姉と年齢も近く家にもよく遊びに来ていたが、ある日突然いなくなった。掘立小屋は、もぬけの殻だった。その後名古屋市内でアリスちゃんを見かけることはなかった。

井上陽水のアルバム『氷の世界』（1973年）の中に「チエちゃん」という曲がある。ざっくりとこんな内容だ。“飛行機に乗って誰にもさよならを言わずに、見送られることもなく、消えてしまった。” “さみしくなったら向こうの浜辺で水着になり太陽に見せつけてやれ。言葉の壁を越えて、向こうにもやさしい人はいるはずだ。”

歌を聞いて、この「チエちゃん」はアリスちゃんのことだと確信した。占領期に何千人と生まれたアリスちゃんの歌だ。アリスちゃんがアメリカに渡り、幸せに暮らしていることを願う。

戦後72年たち、ふるさとの雑木林もずいぶん変わった。戦争の爪痕は、爆弾穴を除いては何もない。夕方の散歩を終え、雑木林を抜けて台地の西端に立つと、鈴鹿の山並みに太陽が沈んでゆく。明日も穏やかな日でありますように。

日本の奇山

9期 山中 重夫

100名山、花の100名山などは、既に選定されていますが、そこで私は、少し変わった山100座を選定してみることにしました。

私の短い山経験では、とても100座を選ぶことは出来ないので、この続きを是非皆様のご協力をお願いする次第です。(読んでもらえれば分かりますが、こじつけも随分あります。)

尚、考えて頂くようクイズ形式で、上部に問題、下部に正解の記載にしています。

(問題)

①【世界一登山者が多い山】

年間登山者は、260万人で、世界の登山者の37%はこの山に集中すること(世界の登山者700万人)。筆者も連休に山頂で記念撮影出来ないほど混雑していた経験を持つ。

②【日本一標高の低い山】

地図に掲載されている山で標高は実に3m。以前は6mあったが、東日本大震災の津波で削り取られた為、日本一の座を獲得した。それまでの日本一の座は、大阪にある天保山4.5m。

③【日本で唯一、歩いては登れない山】

山体は、国の天然記念物。登山道は無く、リフトのみが登山の方法。

④【夏、入山禁止の山】

環境保護の観点から、無雪期の入山は禁止。(但し現在は、全面的に入山禁止とか)

⑤【冬、入山禁止の山】

5月5日～10月25日以外は、入山禁止。山全体が神社の私有地である。筆者は、12月の積雪期に登り、途中デポしたスノーシューを盗難された。神の天罰が下ったか?

⑥【女人禁制の山】

昔は富士山、立山をはじめ信仰の多くの山が女人禁制になっていたが、現在は、この山ともう一つ以外は全て解禁されているようです。但し、こ

の山も山頂の社務所が無人になる積雪期には、多くの女性が登っているようです。

⑦【登山道がループの山】

麓から、山頂まで道がループになっていて360度景色が楽しめます。

⑧【影をもつ山】

夕方に、日本海に影を落とす山。

⑨【低山なのに危険な山】

標高802mしかないのに過去何度も滑落死が起き入山禁止にもなった山。

⑩【少しHな山】

山の形が・・・。

⑪【年に一度酔っ払う山】

その季節は、春。

⑫【石のボッカが求められる山】

強制的ではないが。

⑬【ツツジがスキを負かせた山】

⑭【戦う準備が、万全な山】

⑮【夏は夜行登山がお勧め】

大木がないのでね!

⑯【頂上に祠が2つある山】

信仰する神様が異なるよ。

⑰【住所不定の山】

山頂の住所がないよ!

⑱【所属県を国が決めた山】

3県が争いました。

⑲【山頂では、恐ろしい轟音が聞こえる山】

⑳【××山】

××やま、とは読まないで××せん又はせんと呼ぶ。

㉑【臭いお花畠のある山】

その花が、満開の時は臭い匂いを放つ。

㉒【受験前には登ってはいけない山】

よくすべる。

㉓【領土問題を考えさせられる山】

㉔【日本一水が美味しい山】

個人的印象ですが・・・。

㉕【強風が吹き荒れる山】

半島の付け根にある為、常に強風が吹き荒れる。

㉖【今年の山】

今年は、西暦何年でしょうか。

㉗【日本一小さな営業小屋を持つ山】

北アルプスの中央に位置し、昔は宝石が取れた山。

㉘【日本一の大きな山小屋を持つ山】

お花畠で有名な山。

㉙【日本最古の山小屋を持つ山】

西暦701年に慈興上人により開山された信仰の山。

㉚【昔山頂上から風船を飛ばしていた山】

戦争中の出来事。

㉛【駒ヶ岳は全国でいくつありますか】

㉜【全国・全世界に富士山は幾つありますか】

㉝【難読な山 26 座】コンテストで選ばれました。

1 尺八寸山（大分県） 2 爺爺岳（北海道） 3 月出山岳（大分県） 4 雲母峰（三重県） 5 岐轡堂山（新潟県） 6 阿哲台（岡山県） 7 梅花皮岳（山形県） 8 本富岳（鹿児島） 9 鰐轡山（徳島県） 10 後方羊蹄山（北海道） 11 設計山（北海道） 12 万年山（大分県） 13 父不見山（群馬県） 14 山毛櫟潰山（山形県） 15 皇海山（栃木県・群馬県） 16 子段嶺岳（長野県） 17 光岳（長野県・静岡県） 18 大根下山（福島県） 19 行縢山（宮崎県） 20 獣牛岳（福岡県） 21 天狗角力取山（福

島県） 22 双石山（宮崎県） 23 繖山（滋賀県） 24 斧山（奈良県） 25 三頭山（京都府） 26 山伏岳（山梨県・静岡県）

㉞【二階立てのロープウエイがある】

日本で唯一。

（正解）

① 高尾山（東京）

② 日和山（仙台市宮城野区）

③ 大室山（静岡県伊東市）観光会社の所有物。

④ 景鶴山（尾瀬が原）電源用水確保のためとのこと。

⑤ 男体山（日光）日光二荒山神社の所有物。

⑥ 大峰山山上が岳（奈良県）、他に石仏山（石川県能登町）は、14歳以上の女性は入山禁止のこと。

⑦ 開聞岳（鹿児島）筆者は、鹿児島湾から見る開聞岳は富士山より富士山らしい山と思います。

⑧ 鳥海山（山形県）日本海に影鳥海を落とし海沿いの村落とあいまってその景色は、すがすがしく神々しい。筆者は、花よし、水良し、姿よしの大好きな山です。

⑨ 岩櫃山（群馬県吾妻郡）標高802mしかないが、山全体が岩峰で過去何度か滑落死を出していて入山禁止になったこともある。大河ドラマ『真田丸』のタイトル画面に使われた。

⑩ 安達太良山（福島県）智恵子抄にも詠われるロマンチックな山だが、五葉松のゴンドラから下りたところからは、頂上が女性の乳首に見える。乳首山の別名がある。

⑪ 九重山（大分県）初夏にマヤマキリシマが咲き全山真っ赤に覆われる。（坊がつる贊歌の故郷）

⑫ 大船山（ダイセン山）（九重山）山の崩落が激しく、登山口に石ころを持って登るよう協力文がある。

⑬ 葛城山（奈良県御所市）以前はススキが山頂近くを覆っていたが、ススキが花を咲かせ、枯れたあと自然にツツジが自生し、昔はススキ、今はツツジの名所になっている。

⑭ 鎧岳と兜岳（三重県曾爾村）鎧岳（894m）兜岳（920m）2つの岩峰が、対面し独特の風景である。2つの山は、1500万年前の火山活動により出来たとのことで、近くには曾爾高原があり、たおやかなススキの原が続く。

⑮ 伊吹山（滋賀県）この山は、山頂まで車道が

出来てしまったが、山全体に大きな木が無いため、夏は夜行登山が主流であった。麓から登山者のヘッドライトが続いたものである。山頂は、薬草の宝庫だ。

⑯ 木曽駒が岳、四阿山、雲取山他・・・多くの山は、山並みが県境であったり藩の境であったりする。その為山の守り神もその県、藩のほうを向いて建立されている山が多く見られる。

⑰ 富士山・・・よくご存知の富士山。400 年以上前から、静岡県と山梨県で争っている。但し国土地理院では最高峰剣が峰は静岡県富士宮市と記されているそうです。

⑯ 白山（石川県）明治政府により、白山を加賀の白山にするか、越前の白山にするか美濃の白山にするか3県の争いになり、その理由書が一番良い出来であった石川県に決まったとのこと。

⑯ 十勝岳、雌阿寒岳（北海道）いずれも活火山でその噴火口は、今も噴煙を上げ、強烈な轟音を上げていて恐ろしい。雌阿寒岳の隣に雄阿寒岳がありそちらは、阿寒湖を見渡す静かな山旅が楽しめる。まるで人間の男女と同じで女性は強いものと自覚しよう。また、十勝岳は、三浦綾子の小説『泥流地帯』の舞台となったところで、泥流の中登山道がつけられている。

⑯ 大山、蒜山、氷ノ山など多くの山は、鳥取県に集中する。例外的に医王山（石川県）靈山（福島県）も、ぜんと読む。

⑯ 黒百合で有名な白山（石川県）黒百合は、広い草原に少し咲いている分には臭さは、わからないが、群生していると臭い。白山では、頂上から1時間ばかり下ったお花松原が黒百合の群生地として有名。

⑯ 利尻岳（北海道）山頂直下の登山道は、砂利道でよく滑るので、ロープが張ってある。

⑯ 斜里岳（北海道）この山に登ると北方4島が、すぐそこに見える。まるで本州から淡路島を見る距離だ。自然と領土問題を考えさせられる。

⑯ 甲斐駒が岳の仙水峠の湧き水が一番と思います。尚、仙水小屋の主人の話だと、この湧き水は甲府市の水道になっているとのこと。昔は兵庫県六甲の水が灘の宮水として美味であったが、住宅が山に押し寄せ飲めなくなつた。どちらの山も花崗岩で出来ている。

⑯ 羅臼岳（北海道）オホーツク海と太平洋に面

し、風の通り道になり、2度挑戦したが、最初の登山では、小石が風で飛んできて危ないので登頂を諦め、2度目は何とか登頂したが、最後の5mは、強風のため這つて登頂した。

⑯ 雲取山（東京）標高が2017mで正に今年の山です。

⑯ 水晶岳（黒岳）長野県、その頂上手前に収容人数30人の山小屋がある。2度の台風で飛ばされ現在は5代目。小屋の従業員は、1週間交代で三俣山荘から派遣されている。

⑯ 白馬岳（長野県）白馬山荘は、800名の収容人数を誇る。

⑯ 立山（富山県）1725年（享保11年）設立1980年代まで営業、現在は、国の重要文化財。隣接地に立山室堂山荘が営業されている。

⑯ 乗鞍岳（長野・岐阜）風船といつても陸軍が開発した風船爆弾をアメリカに向かって飛ばしていた。アメリカでは285発が着弾したことが確認され、原因不明の山火事が各地で発生したとされる。又現在のスカイラインは、戦時中軍需道路として作られたものである。

⑯ 日本で20座あり北は北海道駒ヶ岳、南は、若狭駒ヶ岳で、何故か西日本以西にはみあたらない。

⑯ 日本全国で218山、全世界で23カ国54座あります。JR富士駅に216の石で作ったモニュメントがあるそうです。世界のものは、多くは、移民や旧日本兵が付けたものだそうです。

⑯ (読み方) 1 みおうやま 2 ちゃぢゃだけ 3 かんとうだけ 4 きららみね 5 しょらんどうやま 6 あてつだい 7 かいらぎだけ 8 もっちょむだけ 9 うなぎとどろきやま 10 しりべしやま 11 もっこいやま 12 はねやま 13 ててみえずやま 14 ぶなつぶれやま 15 すかいさん 16 こまゆみだけ 17 てかりだけ 18 だいこんおろしやま 19 むかばきやま 20 こつといだけ 21 てんぐすもうとりやま 22 ぼろいしやま 23 きぬがさやま 24 よきさん 25 みづづこやま 26 やんぶしだけ

⑯ 西穂高岳（長野・岐阜）1998年に2階建てロープウェイを導入。スイスには、360度回転しながら進むロープウェイがあつた。

編集後記 ++++++

皆様のご協力によりOB会会報「やまと」vol.32が今年も年末発行にこぎつけることができました。野沢温泉スキー合宿祝20周年。歴史の重みと喜びあふれるページになっています。小屋作業報告、OB会活動報告、同期会便り、現役よりの報告、投稿・・・。「白山開山1300年に寄せて」にも原稿を頂きました。どうぞ、ゆっくりご覧になってください。

本号に原稿をお寄せいただきました皆様に心より感謝申し上げます。また、これからもOB会、現役の皆様の安全な山行と、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会 会報誌「やまと」vol.32

発行日 2017年12月

発行者 久富象二（OB会会長・20期）e-mail chmxm643@ybb.ne.jp

編集・印刷 デザイン・プリーズ

OB会事務局 〒921-8174 金沢市山科町274-13 森 恵利子（22期）

TEL (090)1310-8615

e-mail (PC) mori2000@sr.incl.ne.jp

(携帯) erieri-8615@r.vodafone.ne.jp

OB会ホームページ <http://www.kuwv.net> 管理人／奥名 正啓（15期）

OB会費払込口座（口座名義：金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会）

郵便局（通常払込） 00780-3-14120

ゆうちょ銀行〇七九支店 当座預金No.0014120

北國銀行本店 普通預金No.223703

《事務局から》

- OB会は皆様のOB会費で運営しております。今年度は会費未納の方のみ「会費納入のお願い」を送付させていただきました。ご協力のほどよろしくお願ひ申し上げます。
- 住所が変わられた方は、お手数でも事務局森（mori2000@sr.incl.ne.jp）までお知らせいただけ幸いです。また、お知り合いのOB会員の住所変更をご存じの方がおいででしたら、上記、事務局までお知らせください。特に、各期の代表、窓口になっておられる皆さんのご協力をお願ひ致します。
- 奥名さんから定期的にe-mailでOB会通信を配信していただいております。配信をご希望される方はご自分のメールアドレスを奥名さんまでお知らせください。メールアドレスはma-okuna@nature.email.ne.jpです。
- 事務局ではやまと原稿として、皆様からの近況報告を随時募集しております。同期会の集まりや、個人の山登りなど、団体・個人を問わず簡単な報告で構いませんので、事務局森（mori2000@sr.incl.ne.jp）までお送りください。お待ちしています。
- 2018年9月15日には、創立60周年記念総会・懇親会を予定しています。是非、ご参集ください。